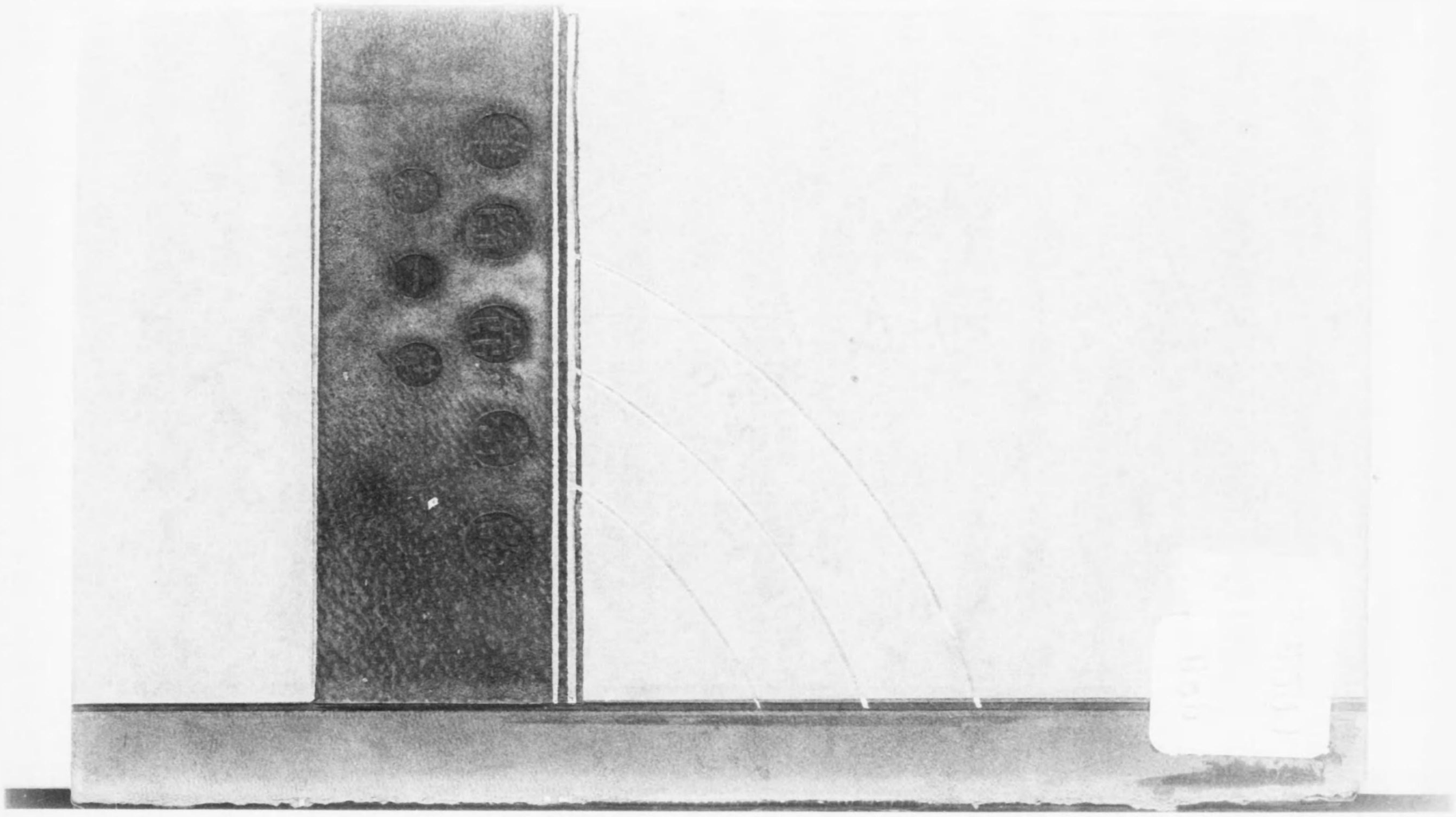
投

特500
686



32

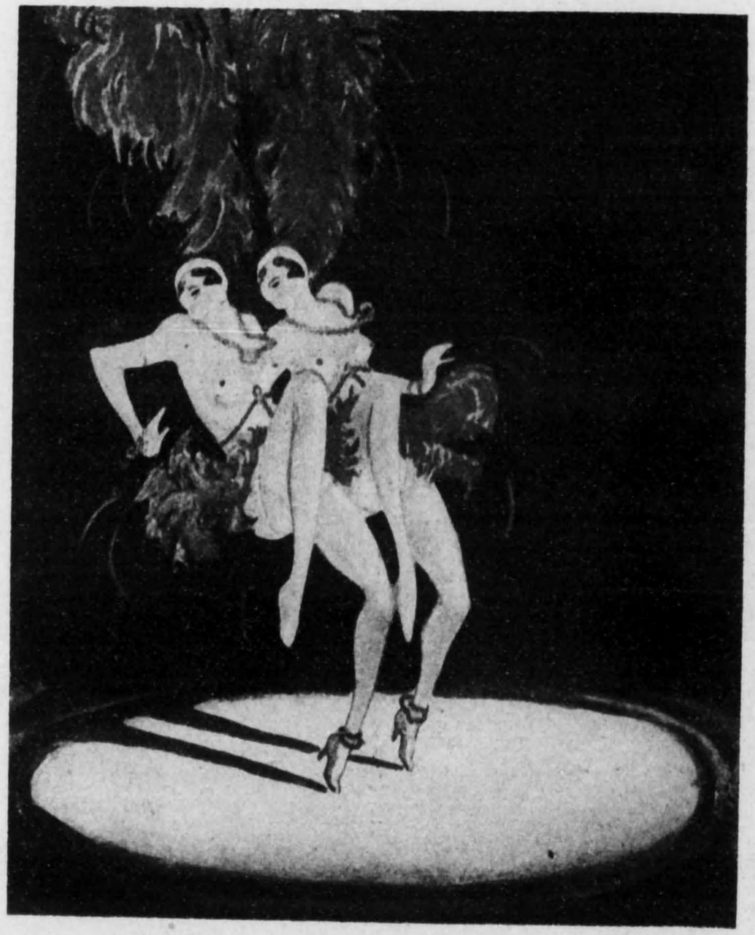
四、三、

四基迁

函 風
號 245
永久保存

禁閲覧 74
特500-686

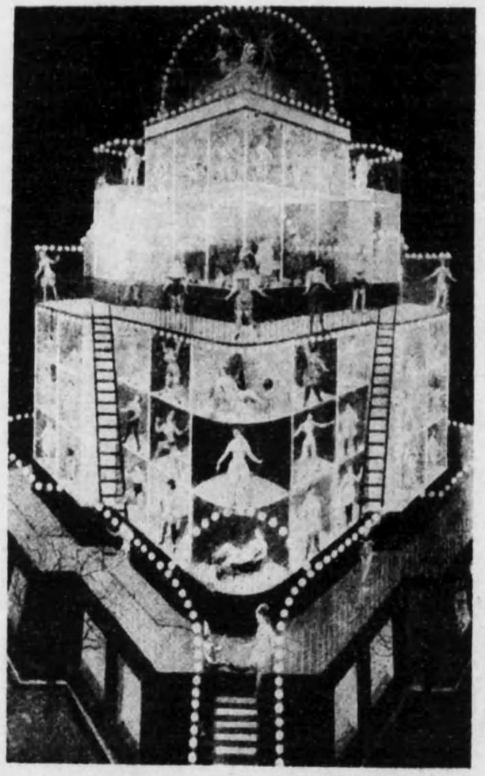
スペイン舞踊



(1)　ドリー兄弟

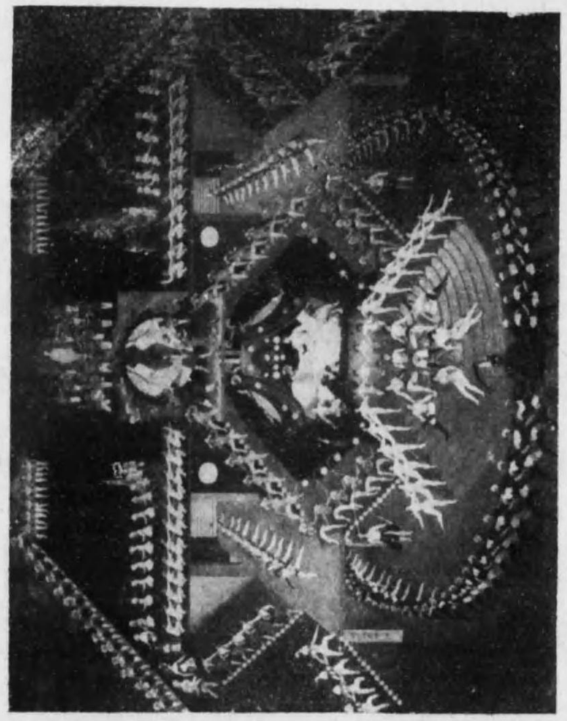
（2）　覗きのホテル

（3）　黒色天國



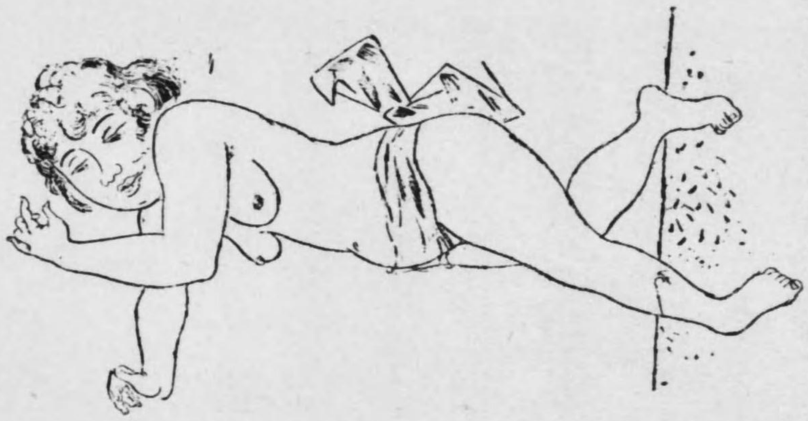
（5） 女の見世物

（4） ジャズ



(6)　ミュージック・ホール

(7)　天國の入口



(8) ヤンス

酒井潔著・装

序

私の持つ一ッの面。それを此の談奇館隨筆中に收めたのが卽ち「らぶ・ひるたァ」一篇であります。

篇中卷頭のらぶ・ひるたァ(世界秘藥論)は本文總頁の半分以上も占める長いもので、やゝ誇るに足る研究だと自信します。

以前「變態資料」や「愛の魔術」に出したものを第一期發表とすれば、これは第二期の發表であります。次いで第三期、第四期と發表出來る樣に勉强します。

其の他くだ〳〵云ふ事は止めます。

昭和四年二月

酒井潔

本文目次

らぶ・ひるたあ……自一頁至二四七頁
(附引用書目)
◇◇◇◇◇◇◇◇◇
性的見世物考(世界性的見世物案内記)……一頁
ダンス・エロチツク……四七頁
小野憲讃字盡
小野蹴嘸字盡……五九頁
アラビヤ錬金術の特徴(中世紀初期)……七五頁
秘具論……八三頁
裝幀の話(張形考)……一四五頁
支那性的書物の解題と張競生博士一派の仕事に就て……一六一頁
腎藥極秘山獺之說……一八七頁

挿畫目次

スペインダンス（原色版）
ドリー姉妹
覗きのホテル
黒色天國
ジヤズ
女の見世物
ミュージツク・ホール
天國の入口
ダンス
「裝幀の話」挿畫寫眞　十六葉
「支那性的書物の解題と張競生博士一派の仕事に就て」挿畫寫眞　七葉

らぶ・ひるたあ（秘藥論）

談奇はサロンの煙草
食卓の藥味なり――ムハメツト・サイシヤ

Love-philtre の嚴格な字義はどこら迄を限界とする？　こんな嫌に言語學者ぶつたセンサクは止めます。大きく解釋して秘藥と見て論を進めやう。

「私は此の稿に於て、東西古今の秘藥處方と、それに關する逸話とを發表する事にした。それで此の長い研究も、煎じつめれば結局、

(1)　世界各國秘藥處方。

(2)　秘藥に關する逸話。

の二項になつて仕舞ふ。

だから、論文家が必ずやる、章、節、項に分けて叙述する方法をやめて、もつともフリーに右二項に從つて書き流した。讀者もそのつもりで御覽を願ひ度い。

先づ秘藥の沿革、性質、使用法等について一般的の解說を試みて見やう。

海の泡から生れた女神、愛の母なるアフロディツトは、春情を增すといふ藥に、其の美しい名を與へ、多淫なる女神は愈々信仰を聚めた。

一體、青年及び健全なる壯年者には、斯ふいふ物は不要なのである。昔、アイダの山を逍遙してゐた一人の青年は、サラ〳〵と流れる小川の邊りに、しどけなく四肢を伸ばして眠つてゐる美しい一人のニンフを見つけた。流れる水のせゝらぎにすかされて、スヤ〳〵と寢入つてゐるそのフツクラとした胸、柔くスンナリとした脇腹、半ば開いた朱の樣な唇何れとして青年の接吻を誘はぬ物とては無い、まして、月桂の森、泉の邊りに隱れ勝ちで仲々得難いニンフの事である。樂しい會合が何度も〳〵繰り返され、又の逢瀨が約束されたらう事は申す迄もない。彼等は、このアルカヂアの時代を夢の如く舞つて過ごしたのである。

だが斯ふ云つた時代は長くは無かつた。男は文明になり、他と折衝する機會の多くなるにつれ、狩獵や戰爭で生命を失ふ機會が多くなり、女子が次第に過剩になつて來た。此處に「多妻主義」の發端がある。然かも東洋に於ては、不姙程女子に取つて悲しむ可き事はなかつた。若し、彼等多くの妻女達の一人が姙んだとすれば、他の女達は爭て同じ樣に姙

まうとし、夫に出來るだけ精力を要求した。或は又、自分が眞實に不姙だと判れば、夫を自分の侍女の方へ向け、代つて子を儲けさせた。舊譯の創世記に此の例がある。

男子が次第に市に住居する樣になり、附近の市と戰を交へる樣になつてから、其妻、姉妹、娘等は奪ひ取られ、奴隷として賣られた。そして、奴隷達の處女性は好色家の犧牲として奉られた。然し、彼等は決してそうした運命を、何時迄も哀しんではゐなかつた、むしろ、愛の技巧に於て素張らしい達人になつた者が多かつた。

若くて、最も美しい女達は金持ちの手に落ちる。金持ちは、たゞ農作のみから收入の得られた當時に在つては、自然、老年の者に多かつた。如何に古代東洋人が、精力絕倫であつたにしても、到底、群る美女達の要求を滿す事は不可能であつた。媚藥の必要が此處に生じた。鑛物界、植物界、動物界、あらゆる部門に涉つて此の秘藥は探られた。古代に於けるこれ等の話は、後に述べる所の創世記の中にもあるが、此の事實の發生は恐らく、紀元前千七百年のものであらう。當時、曼陀羅華（マンダラグ）の使用法は既に少數の者に知られてゐた。

然し、文書に依らず、たゞ口述でのみ傳へられ、然かも、遊牧民は互に他を避けて住居を定めた其の時代の事であるから、その傳播は極めて遲々たるものであつた。

ギリシヤ文學には媚藥の事は左程現れないが、曼陀羅華については、ピタゴラスとプルタークも擧げてゐる。ピタゴラスは、これに「アンスロポモフス」(人間の形體ある)と命名してゐる。これはこの植物の根が屢々二つに分れて、人間の胴と脚の樣な恰好に見へるからである。

ギリシヤ文學者のオイスタチウスは、其のホーマー論の中に、アマゾン人に關する珍らしい傳說を述べてゐる。其の眞僞の程は明確でないが、次の如きものである。

「アマゾン人は戰勝によつて得た俘虜の腕又は脚を斬つた。これは、逃走、陰謀を防ぐ爲め許りではなく、特に彼等の　　を增進さす爲めであつた。其の譯は、自分等が丁度その女兒を右手の方に榮養を餘分に得る樣に、右胸を燒くと同じく、奴隸の手足何れかを斬れば生殖器が强められると想像したからである。それ故に、シシリア人の奴隸が跛を引き

〳〵アンチアナラの女王に近づいた時、女王は仰せられた「跛者は愛の術に最も長けた者ぢや」と。

ローマ人は、その征服した東邦人から學んだ惡行に耽つて墮落した。ジュヴナル、マーシヤル、ホーレースの諸書に　　に關する記事がある。詩人の中でも最も崇高なりリュークレチウスの自殺したのは　　の利いてゐる時だつたと傳へられ、スエトニウスの記す處ではカリグラは妻のケソニアニヤに惚れ藥を服まされて發狂したといふ事である。

此等の藥の成分は、本書に記した處方と殆ど同じである。ホーレースは

「彼の乾きたる骨髓及び肝臟が
　愛の秘藥の成分たる樣に」

と記してゐる。

Ovile（オビイヂウス・ペトローヌス）は秘藥について云つて居る。危險な植物より出來た藥は用ゐてはならぬ。是は激毒のものでなければ効能なしと多くの學者達も信じて居

た時代に發せられた忠告だから、以てオビッドの達見を知る事が出來る。一般に好果あるものは、麻の種を胡椒の中に入れたもの。ビレーツル(驅虫粉の母植)の粉に古酒を混じたもの。メガールの白き葱、希臘ヒメツトスの蜜。松の實。卵。刺戟草等はよいがヴイナス女神の禁じた方法や、有毒物を用ゐてはならぬと其大著『戀愛術』第二篇で敎へて居る。

魔術的媚藥や秘藥はテツサリヤの魔術者達よりオビッド時代に至るまで希臘から羅馬へ輸入され、其後東洋人の魔法が羅馬を風靡して、激毒の諸藥が非常に流行した。當時の秘藥は主として草木で殊に茄子科植物の一つであるマンドラゴールの種、レモーラ魚、蛙の骨、或種の石、龍の落し子、等が使用された。

更に「ヒツポメーン」(ヒツポマネス)には　の卓効がある。これは生れた許りの仔馬の額にくつ附いてゐる無花果大の黑い或は蒼色の肉塊である。母馬は產み落すと直ぐに是れを嚙み取つて了ふといふ。然し、この「ヒツポメーン」なる物は、實は網膜、乃至大網膜なのである。小兒の網膜は溺死のお守りとして永く愛用された。馬の網膜と性愛との間

に如何なる關係ありやは明らかでない。ヴアージルに依れば、ディドーはこれを用ゐてエーネスの愛を得んとしたが、其場合は生憎不成功であつたといふ。ポーサニアスはその『ギリシヤ記』の中に、ギリシヤの或る町には、この「ヒツポメーン」の混ざつた金屬の附いた馬の銅像が立つてゐた。それに近く種馬は牝馬に飛びかゝるよりももつと猛烈に飛び附いて行つた。それで、激しい戀を與へなければ、容易に引き戻す事が出來なかつたと記してゐる。

降つて中世に至ると、媚藥は最初は單なる護符であつて、東洋の動植物の代りに、歐洲のそれが用ゐられた。十七世紀に廣く行はれた媚藥の一である、ジョン、ヘイドンの『神聖指南』なる一書に現れる『讃ふ可き光榮(フォルヴユナ　ヴユネリス)』なる液體は素張らしい評判を受けた。此の液は製造に三ケ月を要するといふ以外は何等面倒が無かつた。これに蟻を使ふ點からして彼等は既にコロロホルム、少くとも蟻酸に就いて漠然とした知識を持つてゐたと思はれる。けれ共、蟻を使用する樣になつたのは、蟻は强く刺すので、何か刺戟的な物質があるとの

想像に依るらしい。これはアラビヤの書に地蜂が用ひられてゐるのに見ても首肯される。

道德の極めて低かつた十八世紀の英國に於ては、媚藥の使用は甚だ盛んであつた。が多くは有害無効に終つてゐる。或る者は羯答利斯又は燐を含み、或る物は水金を含んでゐた。金は、古昔から、若し液體として服用されるならば青春を取り返すと信じられて、十八世紀の終りに至つてさへ、尙、錬金術師や香具師を傭ひ込んでゐた馬鹿な富豪があつた中でも、大金を費ひはたしたアベ・ホアズノン、鼻に腫物の出來る迄服み續けたド・ポムパドール夫人、ルイ十五世の寵を得んとしたバク夫人等がある。

十九世紀の始めに於ても、その使用は仲々止まなかつた。「豪快錠」「サチリオン煉膏」「悅樂散」なぞは到る處の藥種屋で販賣された。

十九世紀末葉に至て其の使用の度は次第に衰へた。その理由は、英國では、醫師が皆無効を稱へたからであつた。佛蘭西に於ても略同樣になつた。一はフランスの婦人があまり多くの子女を持ち度がらないのに基因してゐた。

媚藥の起源と沿革は以上の如きものである。

扨て媚藥は瑞西著名の十七世紀の醫師ヤコブ、マンゼに依つて次の樣に分類されてゐる。

（一）衛生的秘藥

戸外運動、良食、適度の勉學、米、魚、牡蠣、胡椒、ヴアニラの實、生薑、蒲桃、松露適量のアルコホル。

（二）醫療的秘藥

燐、羯答利斯、番木鼈、阿片、琥珀、麝香、キニーネ、其他强壯劑は間接の効驗あり。又黑、赤の胡椒、生薑、等の調味料。

（三）局處的秘藥

芥子、テレビン油、其他外用とする發赤藥。

歐洲に行はれる媚藥は此の三種類に網羅される。然し乍ら、此處に問題は、果して眞の媚藥なる物ありやといふ事である。男性の生殖器は極めて複雜の組織で、直ちに腦に接續し、想像力に依つて興奮させられる事が出來る。强健の男子ならば少しも惡結果なしに多くの實行に耐へるものである。アクトン氏は或る醫師は十四年間、

従つて正妻以外に一、二名の情婦なしではやり切れなかつた

と述べてゐる。が、又一方、一年を通じて、

と告白してゐる人もある。で、要は不可能で、せいぜいするに强健な男子にしろ、過淫の結果、時にその精力不足を嘆ずる場合は、數日の休養と豐富な食物がそれを廢して呉れる。過度、疾病、陰萎等の時でも媚藥は大して効がないものである。媚藥が用ひられる唯一の場合はアラビア人の所謂「若返り」を望む人に限られる。では强健な人の精力增進には何がよいか？　それは次の様な刺戟性食物を攝る事である。

牛肉と羊肉は効力がある。豚肉と若い動物の肉はそれ程効がない。ブレイチナといふ古い著作者は「鶴鴿は非常に榮養があり、懷姙を容易にし、消えなんとする性慾を發奮させる」と書いてゐる。アルバーツス、マグヌスは同じく「鶴鴿の腦髓は、燒いて粉にしたのを赤葡萄酒で呑め。野兎、其他黑い肉の動物も亦血液と分泌作用を增す」と記してゐる。貝類も强精の効能がある。ロンドンに居る或るフランスの娼婦は、黑麥酒と牡蠣の夕食を毎時戀人にすゝめてゐた。數世紀にわたつて牡蠣は賞用されて來てゐる。

(1) 衛生的の物

章魚も亦同樣である。ブラウツスの一戲曲に、章魚を購はうとして市場へ行つて來た一老人の事が出てゐる。『金の驢馬』の著者アピュレイウスは或る金滿家の未亡人と結婚したが、その愛を得ようとして魔術を用ひ、殊に牡蠣、烏賊、種々の介類、海膽等の食事を與

へたといふ廉で告發されたとある。

海鼠も日干しにされ、樽詰めになつて東洋では多く用ひられた。然し何分高價な爲め上流階級に限られてゐた。これ等は凡て、海中の微生動物が燐を有し、これ等を餌食とする魚類も從つて、燐を含む爲めである。魚類の愛用者が愛の技術の巧者である事は今や廣く知られてゐる事實である。

扨て、今度は植物界はどうであるか。

玉葱、にんにく、冬葱は共に　　要素がある。恐らく燐の微量を含む爲めであらう。米、下流のヒーヅー族の樣に平常少食してゐた者が急に多食する時は、相當の効驗があらう、が、ヨーロッパ人に對しては甚だ疑はしい。

チョコレート、これは一時素張らしい人氣があつた。十七世紀の文人、ジャン・エフ・ローシエルの言明する處では、修道院に起つた數多の醜事件は、修道僧がこういふ飲物をやつたのに基いてゐるといふ。平常簡素な食物に慣らされてゐる人には、これは確かに興

奮劑である。が、始終性的滿足を得てゐる人は單なる食物にすぎない。現に性來粘液性であつたボムパドール夫人は、ルイ十五世の愛撫に應へる爲め、琥珀とヴアニラを藥味に入れて、チョコレートを常用したが、少しも以上の樣な効驗に與らなかつた。

蕈、これも古人により推稱された。が、多く、肉の藥味に用ひられたから、その効驗と思はれてゐるのも、肉のお蔭かも知れない。或は又、非常に强力なものとして賞讃された松露と同類と見做されてゐた爲かも知れない。

胡椒、生薑、芥子、蒲桃其他の香料は皆　　だと云はれる。それ等は　　粘膜質の表面を刺戟するので、內服にせよ、外用にせよ、陰莖强直を誘起する。ゲスナーとチャベルは局部の弛緩を芥子の濃い溶液中に浸して治療した。トールレル其他の佛蘭西の醫家も胡椒の効能を證明してゐる。

ヴアニラ。これも同藥の處方に屢々用ひられるが、然し、信ぜられてゐる程のものか如何か疑はしい。

松露。「此等は男子をして熱望せしめ、女子をして快諾せしめる」とデヴンポートは言ふ。酒精、適量に於ては最上の催情劑である。だが少しでも度を過すと如何に絶世の美姫を擁してゐるも前後不覺に寢入り度がる。反對に女が過した場合は、いくらか始末が好く、相手にやがては興醒めになるのである。

(2) 醫療的藥品

前節では食物乃至藥味に就て述べたが、此處では藥物の方を述べる。これは强壯劑の種類を合すると凡そ十種許りあるが、科學者の嚴密なる說では、其中三、四種のみが確認されてゐるだけで、他は迷信的のものとされてゐる。今その三、四種につき醫學的價値の順に述べると。

燐。 誰しも知つてゐる一種の化學的原素である。發火し易く、取り扱ひに注意を要する。大量に於ては勿論劇烈な腐蝕的毒物である。然し、極微量に於ては傳播性刺戟劑として用ひられ、腸窒扶斯の如き重病後の精力恢復の爲め、又は末期の肺癆に用ひられ、痛風リューマチス、等にも用ひられる。然し、媚藥としては、刺戟物として働く許りで無く、幼者には骨を、老人は　を增す。何れにしても、其の効能は昔から世界到る所に知られ古い文獻には隨分奇妙な迷信的な話迄殘つてゐる。例へば、或る化學者の有つてゐた一羽の雄鴨が、以前燐の容れてあつた銅製の器から水を飲んでから、死ぬ迄雌鳥にぢやれ附いて仕方が無かつたといふ。が、然し燐は水に溶解せぬのだから、鳥が燒かれなかつたこそ不思議である。これは、多分、苦しさのあまり身悶えしたのを、性的興奮と取り違えたものと思はれる。燐の効驗に就いては既に前世記に二人の佛人が互に使用し合つてその顯著なる事を證明してくれた。元より、燐は無經驗の者の取り扱ふ可き物ではないが、試みにアクトンの處方を擧げると、

燐　油　一オンス

漸次に增して、一回茶匙一杯宛。

（燐油は、扁桃油一オンスに燐六グレンを混合して製す）

羯答利斯。あらゆる　　の中で、この羯答利斯程卓効あり、同時に又危險な物は少ない。これは廣く西班牙蠅と呼ばれる甲蟲の一種である。長さ一吋程、ハート形の頭を持つて、伊太利、シシリー、西班牙、南部佛蘭西、南ロシヤに發見される。多く、麥皮、水蠟樹、紫丁香花、接骨木、忍冬等の木に集つて、朝と夕暮に其の葉を喰べ、昏睡狀態になる。其の時地面に布切れを敷いてそれ等を獲り、熱湯、熱酢の中へ入れて殺すのであるが、捕獲者は餘程注意しないと眼に炊衝を起したり、氣管支や咽喉に嚔疼痛を喚び起し、皮膚に觸れると發泡したりする。虫の集つてゐる木に腰を降ろしただけで病氣になつた者もある位である。此等は乾かされて粉末にされ樹脂性の揑粉或は軟膏と混ぜられる。時には粉末丁幾、煎液にして、膀胱痲痺、頑固な慢性尿道炎、又は惡性の皮膚病――癩病、乾癬等の治療に用ひられる。

此の藥は、粘膜、胃、膀胱に甚しい疼痛を起し、やがて尿通困難となり、尿道管の膿潰ともなり、赤痢となり、遂には非痛な苦悶の後、死に到らせる。　　與へる塔へ難き疼痛の爲めに、男子は　　となり婦人は色情狂となる。其の一例として、十九世紀の一醫師の記錄には、此の西班牙蠅を二ドラクム（四分ノ一オンス）を魔法婆に飲まされた男を診察すると、妻君は氣の毒に二ケ月間に　　其の他に彼自身の自瀆が十回以上あつた。同じく此の藥を服んだ別の男は、　　で妻や他の女達は其の男を濕布の中に包んで、惡魔を除きに牧師を呼んだ。翌日行つて見るとロを開いた儘死んで、　　もう腐りかゝつてゐたといふ。

斯うした風に、此の藥の作用は極めて激しい。此れを　　用ひると、　　その慾求に塔へ兼ねて、　　程である。從つて、又、此の羯答利斯を服ませる事は凡ての國で禁ぜられてゐる。是を用ひる立派な處方もあるが、胃を害する

から用ひない方がよい。

番木鼈（ホミカ）、ストリキニーネ。

此の薬は科學的に卓効ありとされてゐる。勿論危險な薬劑だから痙攣を起し、時に死に到す事がある。が、大體に、前二者程に危險でない。といふのは其の作用が分明であり、腐蝕性なく、解毒劑も容易に與へられるからである。

ホミカは東印度に産するストリキノス、ナツクス、ホミカと云ふ樹木の扁平な種子である。苦味があつて、一種のアルカロイド、ストリキニーネの爲めに激毒を持つてゐる。尙一種のアルカロイド、ブルシヤをも含むがこれはそれ程激毒でない。

其他に原因する　　には、ストリキニーネは非常に優秀なるものだとアクトン氏は言つてゐる。

阿片。

阿片も他の薬劑同様、少量に用ひられた時は　　の役に立つ。東洋では、

間に數服宛服はれる。或程度では、非常に元氣を附けるが、その範圍を越すと次第に倦怠に陷り、男は今し方まで　　美しい天女を夢みる。西洋では愛の手練に阿片を用ひる事は知られてゐない。

次に比較的効力の弱い五、六種を擧げると、

琥珀（コハク）。及び其の酸（琥珀酸）。此等は鎭痙藥として用ひられるが、醫治的には大した効果を認められてゐない。

龍涎香（リウゼンカウ）。東洋では媚藥として用ひられるが、西洋では雜香（ポトプーリ）の成分を助長させるための香料とされてゐる。抹香鯨の内臟内の分泌物であるが、高價なのと稀なのとで、一般に使用されてゐない。一代の美女デュ・バリ夫人はルイ十五世を挑發する爲めにチョコレートに混ぜて愛用したと傳へてゐる。王をして、「朕が六十路を越したのを忘れさせる唯一の女」と告白させた淫婦である。

麝香。麝香鹿から採る。醫家は傳播性興奮劑、鎭痙劑として用ひる。中世には頗る信

仰されたもので、或る醫師は八十歳の老衰を復歸させた。と斷言してゐる。殊に、ボレリの如きは、或る男が

人を離す事が出來なかつたと言ふ。

巴里の娼婦達は今でも胸や腰の間に袋に入れて携帶してゐる。體臭を隱す爲めである。

麝猫香。沙翁の所謂「最も淫らなる猫の分泌物」である、此の物は、今は媚藥としては珍重されない。

沒藥。夫れ自身大した効果は無い。他の成分を助けるのに用ひられる。

人參。萬病、特に精力減退に偉効ありとして東洋では愛用される。時には金と同じ目方で賣買される。歐洲へも輸入された事があつたが、直きに忘れられて了つた。

其他、古昔卓効ありと信じられてゐた藥劑は尙十數種ある。が就中、歷史に現れたる最古の媚藥はと云へば、先にも少し觸れた事のあるかの曼陀羅華である。

曼陀羅華（マンダラゲ）。舊約聖書創世紀第三十章に曰く、

適々麥秋なる時、リューベン往て田に戀茄子（マンドレーク）（曼陀羅華）を得たり。持ちて以て母**レア**に與へたり。**ラケル**、**レア**に語て曰く。請ふ爾の子の戀茄子を我に與へよと。**レア**答て曰く、爾の我が夫を奪へるは豈に細故ならん耶。又我が子の戀茄子を奪はんと欲する乎と。**ラケル**曰く、然らば則ち彼れ、爾の子の戀茄子の爲めに今夕爾と同じく宿せん歟と。

遊牧の古昔、彼等女性達は既に此の者の偉効を知つてゐたものである。ヘブライのみならず、ギリシヤ、ラテンの諸文獻にも曼陀羅華に關する者がある。不思議な事に此の藥草は、引き拔かれるのを非常に嫌がり、採取者を殺す。それで何か代理の者を以て引き拔くために、犬を此の草に縛り附けて鞭を加へる。犬が走り出す途端に草は棘然（ゾッ）とする樣な悲鳴を擧げて地面を離れるが、犬はそこでばつたり倒れてしまふ。

此の曼陀羅華に對する信仰は中世に迄續き、その根から製つた護符を持つた男女は性力が增すと信じられた。

尙此の他に、むしろ是れ以上に卓効ありとせられたサチリオンがある。

サチリヲン。蘭の一種。單にあるとされた。印度の王アンドロフイルがカス王に贈つたのも此の植物である。マチオールは古代の純粹の物は現存しないと云つてゐる。サレツプ粉は此れと同種類の物で、下層階級に流行したものである。以上で藥草の主なる物は終る。

持たせてアンチオ力が

(3) 局處的藥劑

及び、蕁麻鞭撻の二つがある。局處的なる物としては、摩擦、電氣、發赤塗擦、熱等で、老年、疾病の爲めに甚だしく衰弱してゐない限りことはすでに詳說を要しない程明白である。

蕁麻鞭撻といふのは新鮮な蕁麻で打つ事で其の効驗は過去數世紀に涉つて認められ、文獻も亦、非常に豐富である。打擊の愛の技巧に就いては彼の『カーマスートラ』第三章を參照され度い。其處には種々の方法が列擧されてゐる。打擊には六つの身體の各部と、四種の法、それから起る叫聲の八種類が記されてゐる。打擊は必ずしも手ばかりでするのではない。胸を楔で打つたり頭を頰で打つたり、頰を尖つたもので刺したり、釘拔で胸部や脇腹を打つたりする、他に尙四つの方法があつて全部で八種ある。

以上の、器具を持つて打つ四種の法はすべて熱帶國特有の物で『カーマ・スートラ』の著者ヴアツチャーナもこれは他國人の模倣すべからざる蠻風だとしてゐる。

斯ういふ地方的特習は濫りに模倣してはならない。かのパンチカラス王は交會中娼婦マドハツセナを楔の方法で死なせてしまつたし、クンタラスのシヤタカーニ、シヤタヴアハナ王は寵后マラヤヴアチを鋏の方法で殺したし、ナラデヴアは腕が曲つてゐた爲め刺し道具で踊り子の眼を潰してしまつた。

これに關連して『天國早道』なる一書に「アトリション」と「コントリション」attrition and contrition といふがある。「アトリション」は「擦り附ける」「コントリション」は「擦

り合せる」の意である。修道僧は婦人達にこれを行つた。即ち婦人を跪まづかせて鼻を地に擦り附け」させる。すると丁度に聳へる。そこで僧侶は重みをかけず手も觸れ無い様にして所謂

た。其他、英國に於ても十八世紀の終りには、「鞭打狂」の爲めに種々な家が少女を集めてゐたものである。

此の鞭打、即ち Flagelation を秘藥の中へ入れるは、もとより少々不穩當ではあるが、やはり目的は秘藥と同一であるから、暫く此の部類に入れて置く。

以上で簡單ながら世界秘藥概論を終り、次には諸文献に現はれた、處方の數々を列記して行く事にする。

古代醫術の大家である、プリニウス。ガレン。トルレル達ですら魔術的處方を書いて居る。從つて魔術全盛時代の大アルベール。小アルベール達が盛んに奇怪な處方を發表したのも無理はないであらう。

有名な魔術者アルベール・ル・グランの愛に關する興味ある處方。

禿鷹の右肺を　動作を興奮させる護符として所持せよ。だが禿鷹を捕獲することは難事である。

二人の男女間に愛情を惹起さすには、鷲の巣の中にある、echites と稱する石を取り左の腕に掛けよ。

或る人に愛情を起させんには、烈き獸の心臓或は睾丸（牝獸ならば　）を、食せしめよ。

鳩の心臓、雀の肝臓、燕の　兎の腎臓を乾し、それに同量丈、汝の血液を加へ、更に乾し、汝の思ふ女に食せしめよ。而せば、女、汝に降り、汝の抱擁を受けん。

若駒の額より取りたるヒツポマネスに抵抗し得るものなし。多くの著者は之れを確信す。現代まで永續してかく信じられ、愛の媚藥として利用される。此のヒツポマネスは新しき土製の壺に入れられ、竈にて乾燥さす。それを汝の欲する女に、秘密にて食物と

共に食せしめよ。效能疑なし。

狼の左足の髓を取り、龍涎香とシープルの白粉とを混じポマードとなし、汝の掌にて揉み、其の手にて愛する女を愛撫せよ。女も徐々に汝と同樣に熱中し來るべし。

精力の減少を感ぜし男は、蜥蜴の灰にオトキリ草及び葫葱の脂を加へ、香油となし、愛の戰ひの一時間前に左足の拇趾、並に腰に塗れ。

今一ツのポマードは、若き牡山羊の脂肪、葫葱、龍涎香の脂に團栗を入れて製す。この藥は汝の相手を極めて愉快ならしめる。

若し汝の妻或は愛人にして汝に冷淡なれば鷲鳥の睾丸、兎の腰に香料を加へ調味し、山カラシ、Satyrion（惡臭を放つ蘭の一種）セロリの大量をサラダとなし、上質の油及び薔薇入りの酢につけ女に食せしめよ。

反對にあまりに烈しき愛情を靜めんには、溫和なる牡牛　　を粉になし、一エキューの重さ丈け、煮え立てし犢の肉、スベリヒユ（馬齒莧科）、萵苣に加へ用ゐよ。

失はれし處女性を取り返すには、ヴエニスのテレビン一オンス Asperge（？）の葉の液を少量、鑛石水晶四分ノ一オンスを、シトロン、卵の白味、燕麥の粉の混合液中にて煎じてパテとなし、牝山羊の乳で洗滌し、Rhavis のポマードを塗つた後で、娘の歡樂。然るときは、處女性を失ひし者とは毫も思へざるなり。

姦通をふせぐには、牡狼の性器の背面、或は尖端の髓を採り、其の睫毛、髭と共に燒き、出來た灰を汝の妻の知らざる內に飲用せしむべし。かくせば、汝心安く直ちに旅行に出發して可なり。

アルベール・ル・プチの愛の秘法。

金曜日の朝、新しき小刀二挺を持ち、ミヽズの居る所へ行き、それを二匹捕へて、一度に首と尾とを切斷し、其の胴を持ち來り、汝の　　乾かして粉となし、汝の思ふ女に與へよ。女、汝を拒む不し能ざるべし。

左の手にて魔術師の愛する植物馬鞭草の花を摘み、次の如く唱ふ。『予は汝を地獄の王

子 Lucifer 及び、Attos, Effeton, Canabo なる三魔の母 Belzebuth の名によつて摘む。二十四時間内に予の思ふ女性を隨はしむる樣盡力せよ』汝　三本、左腋下の毛三本を熱したるシャベルの上にて燒き粉となし、スープに入れる樣に、パンの小片の中に混ぜよ。これを食せし女は永久に汝を慕ふべし。

女が用ゐる秘方としては、常の時間にパンの一小塊を取り、　パンの上に九滴の血液を落し、更に鼻の血を九滴落す。次には　元の如くにし、其のパンを竈の前にて乾し、粉末となし、然して其の粉末を、四五度沸騰せしめしコーヒーの中に投じ、知られざる樣に、男に呑ますれば、男は直に　を感ずべし。

淫奔の妻を持つ男は、牡山羊の脂と膽汁との混合物を乾かし置き、使用にあたつて、それを油にて濡し、妻の身體各部、　擦りつくるべし。然る時は、汝のみを思ふ妻となるべし。

艶夢による遺精を防ぐには、寢る時、腹の上に鉛の小薄片を置く可し。

Mme A. R. de Lens の著『Pratiques des harems marocains.』の中に種々奇怪な處方が發表されて居る。其の中には　、姙娠方、避姙方、墮胎方等樣々あるが、それ等より魔術的氣分の濃厚だと思はれるものを左に二三引用して置く。

夫の早くほしい娘は、シャツを作るとき、身體の周圍丈の紐を七ツに切り、其の一ツ〳〵に七種の香料を包み、それを一緒に搗き碎く。夜、門の敷居の上にランプを灯し搗き碎いた香料を並べ、「お婿さん來て頂戴」と七度繰り返し唱へよ。

家庭に於ける支配權を握るには、新婚の夜花嫁は自分の掌に七度僅づゝ放尿をなし、其の度毎に茶碗に移し入れ、更にそれを次の如く唱へつゝ、新郎に呑ませる御茶の中に入れる。

『私よりも餘計に、見ない樣、聞かない樣、語らない樣に、私の水を呑まして上げます』

亂暴な夫を從順にさせる秘法は、夜間夫の睡眠中に、紡車の糸を以て、長さを計り、それを木綿に包み、庭へ埋める。

次は同様に效果ある方法だが、非常に物凄いものである。先づ夜、墓地へ忍び込んで其の死屍を自分の膝にのせ、其の手を持ち添へてパンを揑ねさせる。さて此のパンを夫に食せしむれば、如何に横暴な男でも、まるで死人の様に從順になつて仕舞ふ。

虐待されて居る妻は、蠶狗の鬚を燒いて、其の灰をコーヒーに入れ夫に呑ますれば效果は覿面である。猶一層有效ならしむるには、蠶狗の腦味噌を夜食の藥味入りスープに入れ供する。

夫の愛情が減少したと感じた妻は、七日間毎晩一箇の海棗(さつまじゆろ)を守り、朝に至り夫に疑はれぬ様に食せしめよ。或は小量の肉片を取り數日壁に懸け置き、それを燒き巧みに交ぜ合せて夫に供する。反對に、夫があまりに熱情家で、受け切れなかつたなら、妻は浴場から穢れた少量の水を取り來り、それで(Kerchei)と稱する菓子を製して夫に食せしむる。

二人の新婚の花嫁があつて、自分の夫の注意が、他の花嫁に向はぬ様にするには、蛙の膽汁を相手の家の敷居に塗り、次に牝犬の腹の毛を取つて、相手の寢臺の下にソツト入れて置く。すると流石に美しい向ふの花嫁が、自分の夫の目には牝犬にしか見えぬと云ふ。

あまり仲のいゝ息子と嫁を離間し様とする姑の秘法。嫁のリンネルを洗つて其の絞つた水を息子の食物に入れて食べさせよ。

『Philtres magiques triomphateurs de la Femme』此の書物の中に、次の如き素晴しい媚藥が記載されて居る。

夏、新月の後の金曜日に蝮を誘ひ出して殺し、頭部を切り、それを赤絹の袋の中に入れて持ち來る。家に歸りて、東方に向つて獲物を殺せし杖を投げ、其の袋を薄暗く暑き場所へ懸けて置く。次の夜、裸足にて牧場に出で、眞夜中にならぬ前に、二枚の白きツメクサの葉と二枚の赤きツメクサの葉と、六の Tacoonnet 大戟の莖六本を摘み、新しき

籠に入れる。次に薔薇の木より、白き蕾、赤き蕾と若き葉各一ツ宛を採り、汝の血もて濡せし新しき鷲ペンにて次のラテン文字『*Revarin myrtol her kulbata*』を書きし、新しき羊皮紙に、包む。さて、少くとも三時間は消えざる灯を點し、枕下の卓子の上にそれ等の物を置き、祈禱しつゝ寢につけ。翌朝、昨夜の花と葉とを、井戸の清き水にて濕し、蝮の頭を乾かした場所へ置く。それから夜の十一時頃、卓子の所に行き、羊皮紙の上へ處女像と、赤色の六箇の枝を持つた星を描くべし。其の仕事は、教會の大蠟燭を銀の燭臺につけて其の光の下にて行ふ。

次には、新しき俎板、新しき二挺の小刀、一箇の磁器の器、一箇のよく洗滌した罎、黒色のコップ、アルコール入りの藥鑵、清水を入れた瓶、新しき蠟の棒、封印、藥研新しきコルクの栓をとゝのへる。

眞夜中に三度十字を切り、蝮の頭と、薔薇の葉と花とを藥研の中へ入れて上等のパイの様になし、そのパイを搗いて、すつかり混ぜ合せ、アルコールの火の上に置き粉末となす。此の藥研を熱して居る時、新しい小刀で自分の血を取り、六滴別の皿の中へ落し更に水を加へ、此の皿の中へ藥研の内容物を移し、搖り動かし乍ら沸騰さす。次に三筋の毛髪を取りて燒きて灰となし、加へる。羊皮紙も、袋も同様に燒いて加へる。それ等全部の物を罎中に移し、溢るゝまで水を充し、栓をなし封印を施し、寢臺の中に置く。灯を弱め、祈禱し、睡る。

三日間、それを薄暗き場所に置き、次に窓の所で曝し、三日目の眞夜中に至つて此の靈液は使用出來る様になる。男には五滴以上、女には二滴を飲食物に入れて供する。大變に面倒な媚藥だが、さて其の效能は次の様な大したものである。

其の效能は非凡なものである。老人は若返つて二十歳位の青年の様になる。若い娘は此の媚藥によつて陶然となり、情人の腕に身を投げかけるであらう。或る一人の娘が兄の友達に思を寄せて、秘かに此の靈藥をコップに數滴注いで置いた。所が嫁の居らぬ時偶然臺所を通つた兄が、何も知らず此の藥を呑み下すと、忽ち變な氣になつて

。氣の毒な娘は絶望のあまり、ついに近所の流れに投身して若き半生を終つたと云ふ事である。「Boisson dorée」と稱せられる此の媚藥には、以上の樣な恐ろしい力があるのである。

Gambattista della Porta (1540—1615) イタリーのナポリ人で、有名な自然科學者であつたが、アルベール・ル・グランとよく混同された。其のポルタの名著『La Magie naturelle』より愛に關する奇怪な處方を引用して見る。

(1) Jayet の根を搗き、篩にかけ、粉末となし、酒或は水に入れて、若き娘に呑ませよ。それを呑みし時、若し其の娘にして排尿の我慢出來ざれば、處女ならざる印なり。處女なれば、それを耐へ得るなり。白き鯨糞も右同樣に用ゐらる。又、藤の葉をよくおこりたる炭の上にて燒き漏斗を用ゐて、其の煙りを若き娘　　。非處女ならば排尿を耐ゆる事不ゝ能。若し眞の處女なれば其の煙りも何んの作用もせず、放尿する事なし猶、古風の如く排尿によつて驗するのみならず、月經流出によつて處女非處女を驗する方法は、蘆薈を切りて燃し、其の煙りを娘　　。非處女なれば、大量の月經忽ち流下す。(Livre 11. Chap. 22.)

(1) Jeyet は Jais と同意味で、鑛物の黑玉の事だが、黑玉の根は變だ。或はヴヤイエと云ふ植物があるのではないか?

猶ポルタはヒツポマネスについても、述べて居る。媚藥としてのそれを次の二種に分けて曰。

一、非常に興奮して居る牝馬が大量に漏す　　より製す。

二、生れてすぐの仔馬の額にある胡桃程の瘤より製す。

羅馬帝國の盛時興奮劑として最も尊ばれたヒツポマネス（馬狂ふの義）は考古學者も科學者も鋭意して研究すれど今に其詳を知り得ぬ。去年英國の碩學から東洋にも斯る物有やと問れ種々調べたが手懸りだに見出さぬ。古書に載たヒツポマネスに二樣有り。一は牝馬春を思ふ際身内より出る粘液を採り呪を誦し乍ら諸靈草と和し藥となす者だ。ヴヰルギリ

ウスの詠農(ゲオルギア)卷の三に、春色駘蕩たる日牝馬慾火に身を燒れ高い岩に飛上り西に向て軟風を吸ふ、奇なる哉斯して馬が風の爲に孕まさるゝ事屢々有り、爾時牝馬狂出し、嚴高く湍速く谷深きを物ともせず飛越跳越駈廻る、此時ヒツポマネス馬身より流出づと云ふ。パウサニアスの希臘廻覽記(ヘラエスクリエス)五卷二七章に曰く、オリムピア廟へフォルミス・メナリウスが献納した二つの鍮金(しんちう)製の牝馬像の其一に術士が魔力を附た、因て春日に限らず何日何時何な牝馬でも此像を見さへすれば忽ち發狂し、繩を切り主に離れ此像に飛懸て已ず、恰も豫て識た美麗な牝馬に再會した樣で、激しく鞭つ等の非常手段を施さねば引分る事成ずと。今一つのヒツポマネスは往々新產の駒の額に生居る瘤で、色黑く無果花の大さで毒有り。駒生れて此瘤存ば母馬直に喰了る。然らぬ内は決して乳哺めず。村人方便して母馬が啖ぬ内に切取て方士に賣る。母馬之を聞ば發狂すと云ふ。是れ駒の瘤の臭を聞て發狂するまで母馬が慕ふて了ふから、其瘤を持つ人も他に慕はるゝと云ふ迷信より媚藥として珍重したらしい。

（南方熊楠「馬に關する民族と傳說」）

ヒツポマネスが戀の藥としての價値は暫らく措くとするも、恐ろしき毒性のある事は古代の文獻にも見えて居て、ユヴエナアルの如きも「ゲソニアが顚へる仔馬の額を與へたるネロの叔父の如く汝狂氣とならざるとするも」云々と記して居る。玆に云ふゲソニアとはネロの母小アグリツピナの兄弟羅馬皇帝カリグラの后の事で、正史に依るとチベリウス皇帝の後繼者カリグラはゲルマニクスの子で、暗愚驕弑放蕩を續け遂に狂氣となつたので、帝の果しなき死刑、財產沒收、壓制に抗して羅馬貴族が陰謀を企て、遂に二名の親兵隊長に暴君を弑させたとあるが、一方傳うる所に依れば后ゲソニアがヒツポマネスを以て製せる毒酒を進めたがため、恐ろしい狂暴性を現はし慘虐を行つたのであると云ふ事である。

その性質から云つてヒツポマネスは希臘のサチリオンの如く、情緒を刺戟し更新する爲の催春劑と見る方が正しいであらう。同樣なる目的に Aquae amatrices と稱する酒精性飲料も羅馬人に依つて廣く用ひられた。「戀の火」の意で種々の奇妙なる成分が這入つて居て野猪の膽、琥珀、鯖魚、烏賊、龜の卵、蜥蜴の類、莞菁、蟋蟀、の如きその一例である。

（武田孝三郎「戀の藥と愛の妖術」）

例によつて古代東洋方面を研究して見よう。

古代印度戀の秘法。

〔二二五〕若し男がダツトウーラ、マリチヤ（胡椒）、ピツペリ（胡椒の類 Piper longum）を蜜で混和したもので　塗り、女と　す時は思ひ通りに女を恍惚たらしめる。

〔二二八〕ヴジユラ、スヌヒー、ガンダカ（Euphorbia Trigona）を細片に刻む。これらをマナフシラー（赤砒素）、ガンドハベーシヤナ（硫黄）の粉末と混和して乾燥する。この方法を七度繰り返し、後これら細片を粉末にし蜜で混和する。若し男がこれを　塗布して　女は全然男の思ふ如くになる。

〔二三〇〕この粉末を猿の糞に混和して少女に投げかければ、この少女は他の男と結婚せぬ（「カーマ・スートラ」、第七品第一章。印度學會編）

大聖コーツコーカの『ラティラハスヤ』の第十四、制御篇には、カーマ・スートラより一層多くの魔術的藥物による秘法が擧げてある。

〔二二二〕ヨーニの口に於て水精の如き ᳬ（ヴ）字を觀じ、リンガに於て火の種子 ᳭（ラ）字を思へば　一層よく婦女を制御し得べし。

〔二二三〕左身に於て左眼、左手を以て、左方を通過する風に於て、かくの如く胸、腿、手ヨーニに於ても强く動作すべきなり。

〔二二四〕死者の花鬘、風に飜る裳、蜜蜂の雙翅を交ぜ象牙の一對の粉末と共に撒布すれば必ず滿足を得しむ。

〔二二五〕同時に火葬せられたる夫婦の火葬杖（火葬に用ひたる）を取りて（男子が）婦女を打つ時はその婦女は必ずその男子に從ひ行くべし。

〔二二六〕狂犬の右方の骨面に婦女の名を書き、火葬の柴堆の炭火を以て燒く時は彼女は必ず從ふべし。

〔二二七—二二八〕モーハラター、ギリカルニー、ルダンティカー、ジヤーティカー、アヴー

クプシユビー、ルドラジヤクー及びクリターンジヤリに乳酪と蜜を混じ、額上の標號となす時は三界を征服し得べく、これに身(1)體の垢を交へて或は飲み、或は食する時は全世界を征服し得べし。

(1) 註によるに身體の垢といふに二義あり。無名指の血、心臟の粘液質（シユレーシユマン）（或は單に垢）、鼻の垢、眼の垢、外の垢、これを五垢といふ。又一說には云ふ。汁、唾、血、尿、精液これを五垢といふ。

〔二九〕 カーカジヤングハーに附着する虫を粉末にして與ふれば制御し得べし。若くは硼砂にムニの葉の汁液を滴らせ、身體の垢を交へたるものも可なり。

〔三〇〕 蠅の粉を黑色の牝狗の乳房に混和して粉末となし、自己の　混じて與ふればヴシユシユタ仙の妻をすらも制御し得べし。

〔三一〕 象のマダ液、ガダ、白き罌粟、赤きカラヴイーラの花と乳酪を混和し、白きラヴイジヤター（註にはアルカの根とあり）野羊の角と蜜と五體の垢を混和し、

〔三二〕 罌粟を入れたる水に搗き碎き、飲食と共に與ふれば最上の制御力あり。

〔三三〕 ヴシユリーの片、赤砒石、硫黃粉をよく乾かして一層粉末となし、これに蜜を混合してリンガに塗布すべし。

〔三四〕 この粉末に赤き猿の糞を混合して少女の頭上に撒布すれば不相應なる男子と雖も愛すべきその少女と婚し得べし。

〔三五—三六〕 ヴタ、ヴテイー（註によるにプリヤングヴ）栴檀、小蓋、サルジヤ、クシユトハ、白罌粟これらを以て全身を薰ずれば總ての人に對して制御力を得べし。クシユトハ、青蓮の瓣蜜蜂の翅、タガラの根、カーカジヤングハの粉末を無名指の血に雜ぜて頭上に撒布すれば同樣の效驗あり。

〔三七〕 青蓮の瓣、ダンドートパラ（註サハデーヴイー）ブナルナヴー、サーリヴー（註にゴーピーとあり）にて作られ、煉藥狀になしたる膏藥を眼のアブヒアンジヤナ（藥料、眼瞼に塗る化粧品）とする時は最上の制御力を具すべしと云ふ。

〔三八—三九〕 象に殺されたる人の眼、鼻、心臓、リンガ、舌を以て、ブシュヤの星の交會する夜、神聖なる場所に於て調べられたる膏油は愛の鉤と呼ばる。これ大制御力ありと古聖の言ふ所なり。飲料に食物に接觸にその法を以てすれば一切制御力を生ず。

〔四〇〕 ヴス（註に白き アルカ）クシュトハ。梅檀、グフスリナ（註クンクマ、サフランのこと サ）スラタル（註デーヴダール）と蜜とを混和したるものを如意珠と呼ぶ、薫ずれば最後の制御力あり。

〔四一〕 若き婦女との歡樂に於て、婦女を求むるに於て、商品の販賣に於て、この薫煙法は成就を齎すものなりとハラメークハラーカテは考ふ。

〔四二—四三〕 腸を取出したるチヤタカ鳥の腹に自己　　を入れ、若くは自己の尿を入れ、二つの皿にて蓋ひ、七日の間火を焚く場處に置くべし。これを小丸となして食事の時に與ふればヴシシュトハの妻をも速かに引きつけ得べし。

〔四四—四五〕 ガダの葉、ターリーサ、タガラを麻の燈心に塗り付け、白罌粟の油を取りて人間の髑髏に於て（燃し）、その煤を婦女の眼のアンジヤナとなす時は聖者の心をすら迷はし得べし。

〔四六〕 白の經血を混入せるゴーローチヤナー（牛の膽汁より造り染料に用ふるもの）を以て、テイラカー（額の標號）を作る婦女は世を制御し、彼女に何等の驚異も其處にあらざるべし。

〔四七〕 若しサハデーヴイーの根を蝕の時（日蝕にても月蝕にても）に取り、染料に搗きてこれを以てティラカーを作る婦女はグルの家すらも亂すに至るべし。

〔四八〕 波羅門にパーヤサ（牛乳、米、砂糖を混じて煮たるもの）食物を與ふる時、白き花のバラーの根を拔き處女に依て搗き碎かれたるものを食物に混じて與ふれば、これ嫌惡の情を除く最上の法なり。

〔四九〕 ジヤテイ、ビツパラの樹根の互に抱合して一つになれる處にある蟻の巣の卵を以て胸に塗布し抱擁すれば婦女の嫌惡の念を取り去る。

〔五〇〕 白きドウールヴー、白きブリハテイー、白きギリカルニーを根花共に取りてベテルと共に與へれば男女を制御し得べきなり。

〔五一〕 駱駝の骨、ブフリンガパクシャ（或はブフリン（註にマー）ガラージャ）（ルカゾ）の煎汁を雜へたるものを二十一度黒燒となし、粉末となして等量のアンジャナとなすも亦可なり。

〔五二〕 駱駝の脊狀の骨の中に駱駝の骨の小片を混じて製せられたるアンジャナはこれ一切の人をして言辭自在ならしむ。

〔五三〕 人もし　　以て婦女の左の眼若くは左の足に塗布し終りに於て自己若くは婦女の心臟に塗布すれば彼はその女の最上の情人なり得べし。（ラティラハスヤ」第十四、制御篇）

十五六世紀頃の無上の詩人 Kalyana malla が Guzerate の副王 Ahma-Khan の息 Lava-Khan の性教育の爲めに書いた、アナンガ・ランガには第六章と第七章の魔法的記述がある。第六章は秘藥篇で其の內容を列記して見ると、先づ、婦人の　　速進させる處方七種。男子の　　かせる處方が八種。元氣付け滿足する力を與へる藥が八種。リンガ　　縮少さす處方七種。ヨーニに佳香を與へる藥二種。脫毛處方三種。月經閉止療法二種。月經整調法三種。姙娠法六種。同じく三種分娩を容易にする法四種。產兒制限法四種。コスメチック四種。染髮法四種。肌の淸潔法三種。黑き顏色を直す法二種。乳を堅く大きくする法二種。ダブ〳〵の乳を引き上げ堅くする法三種。惚れ藥。汗臭きを治す法六種。香油九種。口臭治療法五種。

以上の如く甚だ行き屆いたものである。其の全文を譯出し樣と思つたが、非常に長文であるし、佛譯でも英譯でも容易に入手出來る上に、最近、巴里アストラ社發行の英譯からの邦譯、竹內道之助氏のものもあるから、御隨意の書によつて御覽下さい。次に第七章へ移つて說く。

第七章　Vashikarana

ヴシカラナとは、或る特別な藥物や、護符[1]を用ゐて男は女を、女は男を　　自分に引き寄せる魔術である。

(1) この護符は Tilaka と云つて、封じ糊程の大きさの丸い形で、宗教上の儀式が了つてから、

人々の額上につける護符である。

第一方

ヴーツチヤーヤナ曰。含羞草（ネムリグサ）の粉末、青蓮の根、バシヤ・ラチフォリア、大麥の花、以上を汝が　混じ、汝の額上に護符としてつくべし。しかせば世のあらゆる女子を征服し、汝の額を見る女をして、汝を思はざるを得さらしむ。

第二方

巨大なるアスクレピアス（馬利筋屬）の根。ジヤタマンシ。甘松香（ヴレリアナ・ジヤタマンシ）。ベクハンド。ナガルモタの甘香草（Cyperus pertenuis or juncifolius）。コスタス。

右六味を女子の經血と混じ、額上につくれば、あらゆる戀愛に成功し、長く幸福を保つべし。

第三方

タガル（Taberna montana or Coronaria asarobacca）。バンバリミュル（Piper dichotomum の根、或は蕃茇（ビハフ））。メンドハ・シンギ（此の果實は山羊の角や蟹の爪に比較される）。インド甘松香。の同量を混合し、蜂蜜を以て捏ね、更に　或は皮膚の分泌物[1]を加へ、額上に塗（ぬ）れば、あらゆる女を意の如くなし得。

(1) 五塩のことで、「ラテイラハスヤ」（二七―二八）の註を見よ。

妻が夫の愛を得るには、經血中へ濕つて居るゴロシヤナを混じ、これを護符として額上につく。その消えざる間は夫を支配すべし。

次は魔法の點眼膏[1]アンジヤンの使用法。

第一方

第七月の白分[2]の第八日に、墓場或は燒場より人間の頭蓋骨を取り來り、それを燒き、灰を皿に集めて、これをアンチモニーの代りにアンジヤンとして用ゆれば、あらゆる男を魅す可し。

(1) 點眼膏アンジャンの事は、「カーマ・スートラ」にも「ラティラハスヤ」にも屢々出づ。

(2) 自分とは太陰暦の一ト月の前半を云ふ即ち新月より滿月に至るまでを自分とし、滿月より新月に至るを黒分とす。

第二方

竹より生ずる甘露汁、ネガ・ケスカー (Messua-ferrea)。Korphed(蓮華の莖)。マンシラ(赤砒素の硫化物)。右の四味を集め、飾ひ、アンジャンとして用ゐよ。あらゆる人の心を惹くなるべし。

第三方

タッドの樹(赤綿樹の一種)。コスタス。タガーの根。これを水中にて碎き、絹布の一片を濡し、其の絹布の片をシラの油を以て編み燈心とし、點火して、其の煤煙を墓場から取り來りし人間の頭蓋骨の上に集め、これをランプに翳す。そしてアンジャンとして用ゐよ。然るときは見る人をして奴隷の如くならしむ。

第四方

マンシル。ナガ・ケシキー。カラ・アンバー(Ficus glomerosa の果實)。Bamboo-sugar 右を日曜日に、Pushya 星が相會ふ時、點眼膏として使用せよ。これは夫婦間の愛情を濃厚ならしむ、

次の三處方は人を服從せしむる效果がある。

第一方

カング或は白野稗 (Panicum italicum)。白きミショッター (Thomea turpethum)。Bhramara 蜂の翅。コスタス。蓮花。タガーの根。これを男の身上に振りかくれば、直に魅惑の力を發揮す。

第二方

ダタラの莢。ソマ・ダリ莢(The Moon-plante, Asclepias acida, or Sarcostemaviminalis) 死幔の上に置きし薔薇の花環。右の混合粉末に汝の　少量を加へ、汝の愛せる女に振

りかく可し。

第三方

Satavina-Vrisksha（七ツの花を持つ木 Astonia scholatus or Ganitrus, シヴに捧げる靈木）。サンの實（Bengal "Sun"）の同量の粉末を振りかけよ。相手に對して非常なる勢力を得。

Vatica（戀の丸藥）

火曜日に、青樫鳥(Coracias indica)の臟腑を引き出し、其の體内へ汝　　少量流し込み、その鳥の死體を土製の壺に入れ、同樣の壺にて蓋をする（二ツの壺の口を合せる）そして布片と粘土で密封し、淋しき場所に埋め、七日の後に取り出す。（内容物は印度の氣候の爲に通常は腐敗して居る）此の内容物を丸じ、乾し、愛する女に呑ませる其の女は汝の奴隷ともなるべし。

戀の秘法

第一方

男、妻と戯れて後、其の　　を妻の左脚に塗れば、妻を意のまゝになし得。

第二方

妻、夫　　前に、自分の左足を夫　　接觸さす。かくせば、夫を一生自分の奴隷となし得。

第三方

首に斑點のある鳩の糞。岩鹽。バシア・ラチフォリアの葉の同量を取り、粉末となし、その粉末にて　　を摩せよ。その女の主となるべし。

第四方

カスチュリ（普通の麝香、或は樟腦の類）。黄色の Tetu-tree。と二ヶ月前の古い蜂蜜とを練り合せ、　　を摩す。效第三方と同じ。

魔　香

第一方

白檀。Kunku（薑黄とシトロンの汁及びその他の物にて色附した明礬との赤色の粉末）。コスタス。Krishna-guru(黒檀)。Suvasika-pushpa(匂ひある花?)。白き Vala(匂ひあるAndropogon muricatum)。デオダル樅の樹皮。以上を粉末となし、蜜を混じ乾燥さす。この香料を Chinta-mani Dupha[1] と稱し、これを少量祈禱の時に焚けば一切の主となる。

(1) あらゆる思想の主となる香の意なり。

第二方

白豆蔻の果。乳香(ベンジョワン護謨)。Garur-wel（つゞら藤科の植物 menispermum glabrum, or Coculus cardifolius)。白檀。耳形のジャスミン。ベンガール紅蔓。此の香料も同一の効果あり。

Mantra（呪文）

第一 Kamoshwar Mantra

『オー・カメシュワー。しかじかの女を我に從はしめよ!』

カメジュワーの言葉を、神秘なオン或はブラナヴに唱和せよ。續いて、目的の女の名前を誦し、次にアナヤ、アナヤ、ビジヤと發音する。此の呪文を心中にて、一萬遍、百〇八の花を持つカダンバ又はバラリの數珠を操つて唱へよ。供養として呪文を千遍唱へる毎に一度づゝ、同種の花を燒かねばならぬ。かくして行者にマントラ・デヴタの力を與へられるのである。さて此の愛呪の花を目的の女に與へよ。女は汝に從ふべし。

第二 Chamunda[1] Mantra

神秘のブラナヴと共に、此のマントラを心中にて千回唱へよ。Butea frondosa の花一萬個。と Tarpana[2] を供養す。かくして修法終れば行者は呪力を得べし。即ちその花に呪七遍を唱へ女に與へよ。

(1) シヤマンダはシヴの神の妃サクテの名。

(2) 祖先の靈に供食する水。

第三　パドミニ族(蓮花性)に對する呪

此の呪を(一萬遍—十萬遍)繰り返せ。次に日曜日を撰み、ベテルの葉へ、蜜に浸せる花を以てカメシュヴラ・マントラを書き、百遍呪を唱へて、此の花を蓮花性の女に與へよ。

第四　チトリニ族(雜色性)に對する呪

此の呪を神聖なるプラナヴと共に、一萬遍—十萬遍唱へよ。それから、肉豆蔻の粉を芭蕉の根の汁の中に入れて濕めらせよ。それをベテルの葉に包み、日曜日に思ふ女に食せしめよ。

第五　サンキーニ(螺貝性)に對する呪

此の呪は昔の賢人によつて、最も偉效あるものとせられて居る。タガーの根。椰子樹の根。或は Belfruit (œgle marmaros, or cratœra religiosa シヴ神へ供へる樹)を女に與ふる時、女少量にてもそれを食へば呪は直に成る。

第六　ハスチニ(象性)に對する呪

マントラ・デヴタの力を得てより、鳩の翅を蜜に混じて丸藥となし、思ふ女に與へよ直に效あり。

(註)　以上六呪の梵文は英譯のアナンガ・ランガには出て居るが、印刷不明の所があるので殘念だが、此處に引用する事を斷念した。

「カーマ・スートラ」の醫術的秘藥は牛乳で煮る事が澤山出て居る。砂糖も重要な材料である樣だ。蒜、甘草これ等は隨分昔からのものらしい。蜜と酪を混和する事も秘傳である。豆、胡麻もそうだし、生き物では羊、野羊の睾丸、雀の卵等を擧げて居る。

「ラテイラハスヤ」になると**「カーマ・スートラ」**より年代が新しい僻に魔術的記載が多い。所謂秘藥篇では尤も其の感が深い。

此處で樟腦の使用を敎へて居る。前書にはなかつた樣に思ふ。蜜は永遠に使用されるだ

らう。其の他精力增進の處方は大體兩者とも似寄つたものである。

乳酪、蜜、サハデーヴーを混じ、蓮花の蕋を入れ、自分の臍に塗れば百人の婦人を御す。

この法は江戸期春本所載の臍藥りと同じ樣なので、興味を惹かれる。

アラビヤ秘典「匂へる園」にも秘藥の記載がある。私のテキストはキューリュー社のものと、アルチスチック社とのもので共にイヂドール・リズー譯の重版書である。それでキューリュー譯より邦譯された『薫園秘話』と配列は同じである。

第十三章　生殖行爲に於ける享樂の原因に就いて

此の中に性交力增進法として、乳香樹の果實を搗き碎き、泡を除いた蜂蜜と植物性油で伸ばし、飲食を絶つて呑めとある。(飲食を絶つて服藥すると云ふ事はどこでも秘藥服用の秘傳らしい。

就寢前に濃い蜜一杯、二十箇の巴旦杏、百粒の松の實を服用せよ。これを三日間續けよ。又玉葱の實を搗き碎き、篩ひ、搖り動かし乍ら蜜を混じ、絶食して服用せよ」と、

チェニルウスは云つて居る。

以下醫術、魔術半々の樣な處方が澤山擧げてある。

第十四章は不姙症の女子の　狀態と、其の治療法。これは今此處には必要はない。

第十五章は、男子の　について。

第十六章は包莖の治療法。

第十七章は　左の如き處方がある。

(一)　微溫湯で摩擦し、蜜と熟した生姜とを塗る。

(二)　胡椒、ラヴンド(唇形植物)、ガランガ、麝香、を粉末となし、篩にかけ、蜜と熟した生姜と混ぜる。用法は微溫湯摩擦の後此の秘藥にて激しく摩擦する。

(三)　微溫湯摩擦の後、薄い軟い獸皮に、熱い松脂を伸し、これで　包め。松脂が冷たくなるまで其のまゝにして置く。これを度々繰り返す。

（四） 水蛭を壜に入れ、植物性油を滿す。次に太陽に曝し、內容物が溶和したら、其の油狀のもので數日間續けて摩擦する。

（五） 驢馬の性器へ、玉葱を加へ大量の麥と共に煮る。これで牝雞を飼ひ、その牝雞を食用にせよ。又驢馬の性器を油に浸し、これを呑み、また塗れ。

（六） 水蛭を油と共に搗き碎き、これで摩擦せよ。又はこれを壜に入れ、熱い藁屑の中に埋め、塊となるまで置き、これを塗れ。

（七） 管珊瑚と、シヤグマユリと、靴屋の糊と、松や蠟の樹脂と混ぜ、これを以て摩擦する。

第十八章、女子の腋臭及び　の惡臭を除き、これを縮小せしむる秘法に就て。惡臭を除くには、赤浚藥を搗き碎き、桃金孃の水と共に揑ね、この香油で摩擦すれば惡臭を除去す。

他の藥品は、ラヴンドを搗き碎き、麝香薔薇の水で揑ねて得る。これに羊毛の一片を浸し、これで摩擦し、溫めよ。

縮小せしむるには、明礬を水に溶き、胡桃樹の樹皮の煎劑を適當に混ぜた溶液で、洗滌せよ。

次は、いなごまめの果實と、柘榴の樹皮とを煮たものから作られる。此の煎劑を、堪へ得る限り熱くして座浴をせよ。これを繰り返せ。

それから腋臭治癒法がある。

猶注意す可き事は、此の書に於て、玉葱の使用である。玉葱の使用は今迄擧げた印度の秘方には見出せない。而もこれが秘藥中最も効果ある樣に說いてある。玉葱の効果は西洋諸國の人々も認めて居る。

卵の黃味、西洋獨活、蜂蜜、浚藥、肉桂、胡椒等を强精劑として列記してある。

「匂へる園」のエロチツク・コント中で秘藥に關係した代表的なものとして、「ゾオラの話」を擧げる必要がある。大意を述べると……

嘗て有力な王様が、滿月の如く美しい七人の王女を持つて居た。王女達は皆男性の行動を好んで、雨と降る結婚を拒絶して居た。

父王が亡くなると一番上の王女が位に卽き、第七女をゾォラと呼び最も美しかつた。此のゾォラを一人の若い騎士が見て、戀慕し、如何にもして彼女を得んものと乞ひ願つた。

此の騎士アブ・エル・ハイヂアはついに決心して、親友アブ・エル・ハイルウクと黑奴のミムウンとを連れて、王女の宮殿に忍び込み、

發揮する。

此の場合彼等が用ひた食物について一言すれば、アブ・エル・ハイヂアは水の外には、牝駱駝の乳と蜂蜜とを求め、食料には、肉と多量の玉葱とを入れて煮たエヂプト豌豆を要求した。これで

アブ・エル・ハイルウクは肉と煮た玉葱。飲料

としては、玉葱から搾り出した。液汁に蜂蜜を混ぜたものを要求した。

ミムウンは卵とパンとを求めた。

のであつた。斯うした秘藥によつて彼等は大した事業を完成したのであつた。

同じくアラビヤの奇書「老人若返り法」には本の性質が性質丈けに、秘藥方が滿載されて居る。然し私の使用したテキストは完全なものでない。從つてアラビヤ原本（所謂原本と稱するものも、此の種の本の性質として、異本、轉化本等數種有る事と思ふ）に比較したら隨分省略された所があるに違ひない。秘藥についての記述は第二部の第八章からである。

第八章　調製について心得可き事。
第九章　强性劑たる藥用植物及び、其他の藥物について。
第十章　强精劑に就て。
第十一章　同樣の効果ある油脂に就いて。
第十二章　同目的に使用する軟膏について。
第十三章　同目的の繃帶及び束縛。

第十四章　強める摩擦について。
第十五章　精力增進の練藥。
第十六章　同目的に對する散藥。
第十七章　の注入藥。
第十八章　同目的の爲めに用ゐる坐藥。
第十九章　種々なる練藥について。
第二十章　男性を强壯ならしむる香料。
第二十一章　增す香氣。
第二十二章　食物の配合。
第二十三章　減殺する物品。
第二十四章　しむる藥劑の製法。
第二十五章

第二十六章　懷姙劑に就て。
第二十七章　避姙劑に關する注意。
第二十八章　の種々。
第二十九章　の呪文。
第三十章　於ける種々の嗜好と特色の詳說。

右の全譯は到底出來ぬ。それで各章の主要部分丈、大體譯述して、此の珍本所載の秘藥紹介を片付ける。

第二部

第八章

乾燥したチツク豌豆。アラビヤ人は是を嚙み下した。腹中で發生する濃い瓦斯は同質のものと信じた。まつばたんぽぽも同樣の効ありと信じた。これには胡椒、生薑を加

へたりして服用した。玉葱は辛くて濕氣があるが滋養分を缺いてゐる。それを補ふ爲めに小動物の脂肪を加へる。

第九章

本章は漸く三十行に過ぎぬ。擧げられてある物の中には胡椒、小荳蔻、生薑、大茴香等がある。獅子の脂、蜥蜴、カメレオンの類と思はれるイスカンコーの腎臓、野驢の睾丸等中世期の匂ひの強いものもその中に含まれる。

第十章

玉葱と蜂蜜を一緒に煮た物は最も偉効あり、最も不快の少い物である。牡牛の細かに刻み、黑又は濃赤の牝牛の乳で煮た物も次いで卓効がある。「靈能があり諸王に適す」といふ、處方は、蘆薈汁、樟腦、サフラン、肉豆蔻、肉桂、丁子ノ木、白檀、(疑似)高良薑、黑及び白のヘレボア(毛茛科の一種)、其他一、二の成分を加へた物で、白砂糖を加へて清淨な蜜を振り掛け、堅固な器に入れて三ケ月間放置して製す。

「効驗あらたか也と知らる可し——アラー神の御力に依つて」

と著者は恭々しく結んでゐる。

第十一章

効ある油藥であるが、次の如き處方がある。

「ソロモン蟻と稱する蟻を百二十匹採つてガラス瓶に入れ、ライラック油を注ぎ、四十日間天日に曝す。それから蟻を取り出し、かみつれ草を三ドラクム(一ドラクム=八分ノ一オンス)と雄雀の腦髓三個を入れ、この混合藥で足の裏を摩擦する。そしたら「神の御意に叶ふ限り——神は褒むべき哉——」といふ。

「アリの子イザヤ」に記され可成り慘酷なものがある。

「雄雀を取つて、生き乍ら毛をむしり、十匹の地蜂の間へ放しやつて死ぬ迄嘴ばませる。それから牛脂に入れ、肉が片々になる迄煮、それを瓶に容れる。かくして の場合これを以て 靜脈を摩擦する。効驗立所に現はる。」

此の外雄雀、蟻を用ひる處方は隨分ある。芥子(カラシ)や、胡椒を溶かしたライラック油を

といふ事もあるが、これは少し疑はしい。

缺點がある。

「たかとうだい」の樹液も、

第十三章

調製甚だ困難の成分である。

第一に駱駝の　黒燒き。

第二に、癲病の駱駝の瘤、

これから作つた練藥を左の足の親指に塗けて繃帶する。

雀の血はいくらでも　　吳れる。イスカンコー（蜥蜴ノ一種）「たかとうだい」の樹液、白蠟、ライラック油から作つた練藥は　　にさせ、阿片にヘンナを溶かした物でなければ鎭められない程である。

第十四章

六、七種の處方あり、五六十種の藥品を擧げてゐる。其成分の或物はカキリ（蘭の根の一種）「印度木」「シリア林檎」「シリアるりぢさ」等――詩人ロバート、ブラウニングの「アラビヤの醫師カーシッシの不思議なる見聞」に現れるかの「アレッポ種」のものか――其他皆變つた物ばかりである。

第十五章

此の章は　　砂糖菓子とそれと加へる藥味に關して述べてゐる

更にこゝでは胡桃(クルミ)を煮て喰べると同樣の卓効ある事を云つてゐる。

「此の砂糖漬は素晴らしい作用を有し、上記の目的に有益なものである――神のお助けを以て。おゝ神よ榮光あれ！」と記されてゐる。

第十六章

の散藥に就いて記してゐる。これは葡萄酒で嚥下する。葡萄酒はコーランには明らかに禁ぜられてゐるから面白い。

「煑沸した鶏卵十個をとり、殼を破つて卵黄を取り出す。別に牝牛の牛乳を鍋に入れ、其の中へ「たがらし」の種子を振り掛け煑立てる。そして此の牛乳へ先の卵黄を入れ、牝牛の脂と混ぜ合せ、粉末になる迄放置する。そしてそれだけを食つてゐる。」

鳥獸の　仲々重要である。

「黄色の犢の鹽漬にし、乾され、碎かれた物は大いに

又牡牛の　粉も同様の効果があるが、これは、牛乳、又は葡萄酒で嚥み下す。

第十七章

灌腸に依つて腸を洗つて置かねばならぬ。用ひられる物は「かみつれ」(菊科植物)亞麻仁、明礬、胡蘆巴(豆科植物)テレビン、薊、無花果等である。腰部を肥らす物には胡桃油、牝牛乳、ベラドンナ、生薑、アスパラガスの種子其他の成分である。

此等の　に用ひるものである。

第十八章

エスカンコーの腎臓の脂を胡麻の油に浸し、亞麻仁「かみつれ」、生薑と混じた物が坐藥として推稱される。

第十九章

モカイドの處方に曰く、「かみつれ、胡椒、生薑の各一オカと、煑た黄卵二十個を取り、耶子蜜百二十ドラクムと混和する。此れを食前、食後に内服する。」と。

第二十章

こゝで香料といふのは焚く香でなく、口中に入れる錠劑の事である。シェイク・アブデユラズイズが最初の處方を殘してゐる。それに依れば埃及の王が之を用ひた。テレビン油に浸した檟如樹の皮、或る牡の動物の胸の部分等を含んだもので、水盤の中で煑られると、ゴムの様な物質になる。口中に入れて嚙んで居り、唾は飲み下すが、藥は嚥んではならぬ。

第二十一章

此の章は、かの「フェテイシズム」に關聯する臭物崇拜に就いて語つてゐるが、「體臭、」花香等の外、別に名を擧げてゐない。

第二十二章、第二十三章、第二十四章　省略。

第二十五章

處方は前章のそれ等と同じく、茴香(ウイキヨウ)屬、胡椒、麝香、樟腦、生薑、等である。其の効能は

「あまりの　　られなくする」と云ふ。

第二十八章

右の臀部に狼又は野兎の膀胱を括り附けると　　となる。又その膀胱を酢に入れて飲むも同効がある。

玉葱、鷄卵、特に雀、鴨の卵は効驗特に著しい。

イスカンコーも大効があるがカイロでは用ひてはいけない。それはナイル河の水質に因るので、男子の慾望を減殺するが女子のは反て增すといふ。

イスカンコーの大効のあるのは二つの生殖器を持つてゐるからといふ。

ライラツク油に混ぜた雀の肉も卓効があるが、足の裏を地面に著けたら無効になる。

其他、蜥蜴、牡山羊、鵠鴣(シヤコ)等それ〳〵同樣の効果があるが、此等は前章の各處に現れたものと大同小異であるから省略する事にする。

第二十九章、第三十章、省略。

トルコの愛の經典として代表的なものは、Omer Haleby, Abou Othman, の名著である「El Ktab」又の名「愛の秘律」とでも譯さうか、とに角「エル・クターブ」として世に知られて居る。

此の第五章に色々な秘藥に關する記述がある。先づ第一は香料の効果で、アルビー先生は麝香を甚だ推奬して居る。

「コーラン」第二十六章、第八十三節にも、

「汝麝香の香を籠めし、うまし酒を女に與へ呑ましめよ」

と出て居る。

著者は更に麝香の効能を上げ、最上のものは Khorâcân のもの、其の次は支那、印度のものがいゝと云つて居る。

麝香に純粹な沒藥を加へて、熱せられた石炭の上に置く時は、」

が出て來るとも書いて居る。

乳香の細粉	二・五〇瓦
麝香の細粉	〇・五〇瓦
沒藥の細粉	二・五〇瓦
樟腦の細粉	〇・五〇瓦
枝端に咲くサリエットの花房	二・五〇瓦

テイムの花房	一・五〇瓦

右を五百瓦の薔薇水に混ぜる。これを罎の中へ密封し、四十日間太陽に曝す。それから搾つて上澄みの液を取り、更に濾過して、同じ罎の中に貯へる。

此の秘液を長く貯へる爲には、七十五瓦のアルコール（精製した）を加へ、更にバグダッドの薔薇の精三滴を注入せよ。

この香は神經、心臟、性慾を强壯にする。そして記憶力を非凡ならしめる。此の香を衣服に用ゐれば心地よき芳香を放ち、虫害を防ぎ、惡魔等の惡影響をまぬがれる。

部屋の中で焚く香は

前の材料を等量に混ぜて、少量の薔薇水及びアルコールの中へ入れ、よく混り合つた粉を作り、これに普通分量六分ノ一のアラビヤ・ゴムを加へ、皿の中で前後左右に搖すつて混合する。それから榛の實程の丸藥を作る。

豌豆大の香を部屋の中央、北、南の三ケ所で焚く。これは男女が此の室へ這入る二十五

分間前に焚かねばならん。そして男性の方が虚弱であつたら、香の二倍量を焚け。

アルビーは例のコーラン萬能主義を發揮して、言葉の魔術に言及して居る。いゝ言葉の暗示を與へられると、身體上にまでいゝ影響を及ぼすと說く。が此の章は大して秘藥には關係ないから飛ばす。(飛ばすと云つても此處は一頁許りだから大した事はない)

此の著者は當時(十九世紀中葉)トルコに於ける有名な醫者だから、精力減退に對する實際的忠告も書いて居る。

先づ、冷水浴だ。これは全身浴及ひ局所浴つまり非常に冷い水を　　に注ぐ。

　　に行ふ。或は朝夕勵行すれば精力を得る。それから、此の方法で頑强な淋疾も癒ると云つて居る。

次には所謂食膳春藥である。此の食料による强精法と云ふのは、藥品なんかによるよりも一番自然的なやり方だ。アルビーは色々の材料を擧げて居る。卵、魚類、松露、扁豆、羊肉、蒔蘿(植物)、茴香、牛の睾丸、鷄、椎蕈等々である。

然し「コーラン」にもある通り、第一には自分の腹の具合を整へて健康を保たねばならん。「コーラン」第七章、第二十九節。

「食へ、呑め、適當に」

次に出した處方は少しも危險なくて甚だ効果あるものであるさうな。

ストーシヤスの枝端の花房	一五瓦
桃金孃の漿果	二五
茴　　香	二〇瓦
野生人參(よく還元された)	二〇瓦
サフランの花	一〇瓦
よく乾いて、ひゞ割れた海棗(なつめじゆる)	三〇
卵の黃味	四
清麗な泉の水	五五〇瓦

右を陶器の皿に入れて、火にかけ、二十五分間嚴封して置く。次に火から降し、汁を搾り去つて、中味がやゝ冷へてから、

純粹な蜜　五〇瓦
鳩の生血　二滴

を加へ、よく混合する。一晝夜よく浸して置いて、三四度搖り動かし、普通の篩にかけて漉す。

斯うして出來た練藥を七日間、コーヒーの匙で一二杯宛、寢る前に七日間續けて服用せよ。何んと此の出來さうに思へる秘藥を試みる有志者はありませんか？

大體古代に於て秘藥とか毒藥とか云ふ種類の原料は植物性のものが多かつた。それは勿論、昔の不完全な道具によつて製造するには、鑛物や動物より、草木の方がやり易かつた爲でもあらう。とに角、エヂプトのメネス王時代には、色々の秘藥植物が發見されて居た青酸なんかの使用法も知つて居た樣である。古代の藥物學に於ては、毒藥の大部分卽秘藥と云ふ思想があつた樣で、蛇の毒だとか、カンタリスだとか、植物では阿片、アニコツト鑛物では砒素、水銀等、皆秘藥としても使用したものらしい。全く命がけの話である。

次には古代支那の戀の秘法に目を轉じやう。

「千手觀音治病合藥經」

若有二夫婦一不レ和如二火水一者。取二鴛鴦尾一於二大悲像一咒一千八十編身上帶レ彼。是終身歡喜。相愛敬。

「龍樹方」

取二鴛鴦心一陰干百日係二左臂一勿レ令二人知一卽相愛。

「又方」

心中愛レ女無二得由一者。書二其姓名二七枚一以二井華水一東向。正視二日出時一服レ之必驗。

密不レ傳。

「如意方」

令二人相愛一術。取二履下土一作二三丸一。密着二帶下一佳。

「又方」

戊子日取二鵜巣屋下土一燒作レ屑。以レ酒共服。使二夫婦相愛一。

「又方」

取二婦人頭髮廿枚一燒。置二所レ眠床榻下一。卽夫婦相愛。

「靈奇法」

取二黃土一酒和塗二帳內戶下一方圓一寸至レ老相愛。

「又方」

取二猪皮並尾一着二方一寸三分一內二衣領中一天下人皆愛。

「又方」

取二竈中黃土一以二膠汁一和着二屋上一五日。取塗二所レ欲人衣一卽相愛。

「又方」

庚辛日取二梧桐木東南行根三寸一刻作二男人一。以二五色一綵二衣之一着レ身令二親疎相愛一。

「枕中方」

老子曰。欲レ令二女人愛一取二女人髮廿枚一燒作レ灰。酒中服レ之苦愛レ人。又云。五月五日取二東引桃枝一。日未レ出時作二三寸木人一着二衣帶中一。世人語貴自然敬愛。又云。夫婦相憎之時。以二頭髮一埋二着竈前一。相愛如二鴛鴦一。又云。嫁婦不二爲レ夫所レ愛。取二床榻下塵一着二夫食一。勿レ令レ知卽敬愛。又云。孔子曰。取二三井華水一作レ酒飲。令二人耐レ老。常得二貴人敬念一。復辟二兵虎狼一。又云。人求レ婦難レ得。取二雄鷄毛二七枚一燒作レ灰末。着二酒中一服必得。

「延齡經」

取二未レ嫁女髮十四枚一爲レ繩帶レ之見者腸斷。

「又方」

取二雄鷄左足爪一。未レ嫁右手中指爪燒作レ灰。傅二彼人衣上一。

「又方」

取二已爪髮一燒作レ灰。與二彼人飲食中一。一日不レ見如二三月一。

「又方」

蜘蛛一枚。鼠婦子十四枚。右置二瓦器中一陰乾百日。以塗二女人衣上一夜必自來。

「陶潛方」

戊子曰書二其姓名一着二足下一必得。

「如意方」

令二人相憎一術。取二馬髮犬毛一置二夫婦床中一卽相憎。又云。令二人不レ思術。遠行懷二離土一不レ思二故鄉一。

「靈奇方」

以二桃枝三寸一書二姓名一埋二四會道中一卽相憎。

「如意方」

止レ淫術。三歲白雄鷄兩足距燒末。與二女人一飲レ之淫卽止。又云。欲レ令二淫婦一心一方。取二杜荊實一與呑レ之則一心矣。又云。目目陰目目陽（陽符朱二書之一入レ心）目目陽目目陰（陰符此欲レ絕二淫情一入レ腎朱二書之一可レ服）此二符以レ丹塗(1)二竹裏白浮一令レ赤。乃以空青書符呑レ之淫卽絕矣。

(1) 竹裏白浮とは竹中の白皮也。

又云。驗淫術。五月五日若七月七日。取二守宮一張二其口一食以レ丹。視二腹下一赤止二兜中一陰千百日。出二少々一治レ之付二女身一拭終不レ去。若有二陰陽事一便脫。（曰守宮蠅蜓也。牡新交三枚良之）

「又方」

曰馬右足下土着二婦人所レ臥攝床下一勿令レ知。自呼二外夫姓名一也

「延齡經」

療二奴有二姦事一令二自道一方。以二阿膠大黃一磨二傅女衣上一反自說。

「如意方」

止ゝ妬術。可二以下杜意苡二七枚上與呑上之（杜意苡　是也）又方。其月布裹二蝦蟇一枚一盛二着瓮中一蓋ゝ之。埋二厠左一則下ゝ用ゝ夫。

支那醫藥の鼻祖は黄帝と神農である。『史記三皇本紀』に

炎帝、以赭鞭、鞭草木、始嘗百草、始有醫藥。

炎帝は神農のことで、色々草木を實驗して藥の祖になつたとある。黄帝は相官、文學、宮室、衣服、器用、貨幣、武備、舟車、歷法、算數、醫書を始めるとあるから、彼は醫術の先祖としてある。

それから岐伯、扁鵲、漢の張仲景、後漢末の華佗、唐代の孫思邈、金代の張元素、劉元素、元代の東垣、元末の丹溪、明代の天叔和なんて大家達が、ぞく〳〵著書を出したので醫藥に關する書物は實に澤山ある。

所で支那に於ける特種の現れである神仙思想と道教の教義とが融和されて、一種の魔術的藥劑の處方が、方士或は道士によつて發表された。『山海經』にも服用する藥と佩用する藥の事が書いてある。佩用する藥とは明かに魔術的禁厭的のものに違ひない。

支那人の所謂仙藥とは、主として、不老長生藥である。それから一日に千里を走るとか輕身飛行とか、隱見自在とか、猶樣々な効能があるが、やはり其の根元は今から考へて見て媚藥或は强性劑に外ならぬと思ふ。

此の仙藥と普通の醫藥とは區別さる可きものであるにかゝはらず、支那の醫藥書には大低一緒くたに所載されて居る。これはかの有名な『神農本草經』を校訂した梁の陶弘景なんかが、醫術的本草と、魔術的秘藥とを混合してすまして居たので、續く連中がこれを眞似たとも思はれるが、一體怪奇好みの支那人の性格にもよる事だらう。

道教の變形末流の閨丹術なんて一派は、道教の教義を何んでもかでも性慾方面へ結び付けて、奇怪至極な藥を秘造して居る。此の方面で有名な書は『庚辛玉册』二卷。明の宣德中寧獻王が宣德年中に編纂したもので、仙術用卽ち丹爐に供用する藥をのみ集めたもの

である。金石、靈苗、靈植、羽毛、鱗甲、飲饌、鼎器の七部門に分ち、五百四十一種の藥を列擧して居る。（此の書未見。中野江漢氏、「支那の珍藥秘藥」による）

本草書中の王座である、李時珍の**「本草綱目」**此の大著述の中に、「服器」を藥品の中に入れて居る。二三例を擧げれば、

服帛二十五種の中、

病人衣。褌襠。自經死繩。死人枕席。

なんてものがある。勿論魔術的藥用品に違ひない。更に人體に關するものは三十五種ある。

髮鬆。亂髮血。頭垢。耳塞。藤垢。爪甲。牙齒。人尿。小兒胎屎。人屎。溺白垽人中白。秋石。淋石。癖石。乳汁。婦人月水。人血。人精。口津唾。齒垽。人汗。眼淚。人氣。人魄。髭鬚。陰毛。人骨。天靈蓋。人胞。胞衣水。初生臍帶。人勢。人膽。人肉。木乃伊。方民。人鬼。（右同書による）

どれもこれも魔臭紛々たる物許りで、これ等を實際用ゐたらしいから、支那は如何にも徹底した國である。

人體からの排泄物で作る秘藥中に「秋石」と云ふのがある。これは補腎の聖藥で左に中野氏の**「支那の珍藥秘藥」**一三〇頁より一三五頁まで引用して置いたから、ついて御覽下さい。

「秋石」は補腎の聖藥と呼ばれ、强壯劑中の强劑となつて居る。而も其材料は人間の小便といふから面白い。「秋石」は「秋泳」ともいふ。其製法は

秋月に童子の溺を取つて缸に入れ、石膏末七錢を入れて、桑の棒にて攪き廻し、澄むのを待つて、其上水を捨てる、斯くて二三回した後に、秋露水を入れ、更に攪き澄して其沈澱せるものを、灰の上に紙を舖き、それにあけて乾かす。

のだそうである。「秋石」といふ名稱は斯ういふところから來て居る。又單に、

男の小便を壺に貯へ置いて、約三ヶ月後に上澄みを明けると、底に沈澱した固形物が

殘る。

ともいつて居る。其質は白くして堅い、准南子「丹成號曰秋石、言其色白質堅也」とある。「人中白」と殆んど同樣であるから、これを混同するものもあるが、玄人には確然たる區別があるらしい。秋石は童子の溺に限らず、少女の溺をも材料とするといふ。本草綱目（卷五十二）に

嘉謨曰、男用童女溺、女用童男溺、亦一陰一陽之道也。

とある。男は少女の溺を材料とせるを用ひ、女は少年の溺を用ゆる、一陰一陽の道といつて居るが、なかなか理窟がありそうである。

其効能に至つては、實にたいしたものである。虛勞、冷疾、寢小便、夢に遺精する卽ち身體が衰弱した者に効能があるが、其他滋强の効能に至つては**本草綱目**（卷五十二）に

腎水を滋くし、丹田を養ひ、本を返し、元に還り、根を歸し、命を復し、五藏を安んじ、三焦を潤し、痰欬を消し、骨を退き、軟を蒸し、塊を堅くし、目を明にし、心を清

め、年を延べ、壽を益す、（嘉謨）

とあるから、たいしたもので「補腎の聖藥」の所以である。効能中「三焦を潤す」といふことは、漢方にて六腑の一で、上中下に分れ、上焦は心臟の下に在り、中焦は胃の中脘に在り、下焦は膀胱の上口に在りて、排泄をつかさどるといふ。難經に「胃上口以上爲焦主內而不出、胃之中脘曰中焦、主腐熟水穀、膀胱上口爲下焦、主出而不內」とある。

秋石を材料とせる滋强劑に七種ある。何れも支那の藥店に於て賣つて居る、何れも絕妙な効果があるといはれて居る。

（イ）和石還元丹……秋石に棗と、綠豆、酒等を加へて煮つめるのださうである。老衰者が服すれば壯者をしのぐ程性慾旺盛となる。（經驗良方に據る）

（ロ）陰陽二鍊丹……陰陽の二種に分ける、秋石を煮つめて作るのであるが、陽煉法と陰煉法共に、時間と火の加減に據る、其方法は詳しく葉石林の「水雲錄」に揭げてあるがこゝには略する。之を服すれば陰陽共に强壯となる。

（ハ）　秋氷乳粉丸……秋石に麝香とか乳香とかを加へて釜を以て煮つめる、其方法は揚氏の「顧眞堂經驗方」に詳しい。其效能は元陽を固め、筋骨を壯にし、延年不老、百病を却くとある。

（ニ）　直指秋石丸……秋石に鹿角、膠炒、桑螵、蛸炙、茯苓を加へ粉末となし、糕糊を以て丸となし、人參湯にて嚥下すれば濁氣を治して精を增すといふ。「仁齊直指方」に詳しい。

（ホ）　秋石交感丹……秋石に白茯苓、蒐絲子炒を加へて粉末と爲し、百沸湯と井水とを以て煮、丸となし、鹽湯を以て服する、白濁、遺精を治すといふ。鄭氏の「家傳方」に詳しい。

（ニ）　秋石四精丸……秋石に白茯苓、蓮肉、芡實を加へ粉末となし、更に棗肉を和して蒸して丸となし鹽湯にて服する。

（ホ）　秋石五精丸……秋石に蓮肉、眞川椒紅、小茴香、白茯苓を加へ粉末となし、之に棗肉を和して丸となし、鹽湯溫酒にて服する、常に服すれば補益となる、劉氏の「保壽堂經驗方」に據る。

其他本草綱目には、腫脹忌鹽、赤白帶下、噎食反胃、服圓發熱に効ありと書いてある。

藥店では單に「補腎水」として賣つて居るものもあるが、「補腎水」とか「補腎湯」とかいふのは、其名稱同じくして其材料に相違あり、秋石とのみ限つてない。

秋石は補腎藥として最上のものであるから、之を漫りに用ゐては其効力過度にして身を害ふ。瓊碎錄に

此藥を服する者は、多く是れ　の人、これに藉つて　虛くし、妄りに眞水を作る、愈涸る、安んぞ渴せざるを得んや、　を以て之を補ふこと甚しければ遂に身を亡ぼす。

とある、

虛くし、此藥によつて之を補ふの害を述べて居る。また五雜俎（卷十一）には

秋石を煉るの法あり、重男女の小便を用て熬煉して雪の如くにし、鹽を當て之を服す能く腎を滋し、火を降し、痰を消し、目を明にす、人天地の生を受く、其本來の精氣自ら一身の用に供るに足れり、少壯の時、酒色喪耗し、宴安鴆毒、原味其内を戕ひ、陰陽其外を侵し、空しく皮骨を餘して、自ら持すること能はず、而して乃ち腥臊穢濁の物に倚賴して、以て命を奪ひ、魂を返すの至寶と爲す、亦已に愚なり矣、況んや此藥を服する者又年を延き、病を祛るの計を爲さず、而して之に藉つて志を肆にし、欲を縱にするの地と爲す、往往利未だ得ずして、而し害之に隨ふこと勝て數ふべからざる也。

と戒めて居る、理ありといふべきである。

中野氏の著書を引用さしてもらつた傳手に、も一つ興味ある喇嘛の奇藥と云ふ文を『北京繁昌記』の中から轉載する。

淫怪なる魔神を崇拜する喇嘛僧が、色慾を增進し、精力を振興する奇藥を持つて居るとの風說は昔から傳はつて居る。此興奮劑を得んが爲めに喇嘛僧に接近する者が多いとの噂

もある。其眞僞は知らぬが、裨史小說などを繙けば、清帝の疾ある時には此奇藥を以て治療したと見えて居る。此奇藥が西藏から始めて支那本土に傳來したのは清の世祖の時であつた、左に雜書を漁つて書いて見る。

清朝に興國の淫婦と亡國の妖婦とがあり、清は淫に興り淫に終つたといつてもよい。亡國の妖婦は彼の西太后で、興國の淫婦とは、太宗の后、順治帝の母、博爾濟氏卽ち孝莊皇后である。后は天成の妖艶に加へ巧笑柔媚以て鬼神を魅するに足り、肌膚玉の如かりしとて宮中にては「玉妃」の稱があつた。明の洪承疇（明朝の北部總司令で、崇德二年盛京松山の戰ひに敗れて俘虜となり、獄中に於て絕食して不屈の決心を示して居た）を閨中に說いて清に降らしめ、愛親覺羅氏の爲めに三百年の運命を開拓したスタートとなつたことは清朝興亡史を繙く者の誰も知つて居ることである。傳ふる所によれば玉妃には「蠱術」といふ術があつて、

られたといふ。太宗が兵を外に用ゐて不在勝なるを幸ひ、玉妃は布團ひの車に美少年を載せて宮中に引き入れたといふことである、晉の賈后

日本の吉田御殿を合せた好三幅の亂行である。

當時太宗の母弟に睿親王多爾袞といふ人があつた、排行第九番目に當るので九王とも稱する。太宗の突如たる崩御と共に皇位繼承問題が起つた時、九王は第一候補者であつたが孝莊皇后の色仕掛に遇ひ、闈帳裏の夢の間に當年六歳の福臨王(順治帝)が皇位を嗣いだ。九王は其後攝政となりて益醜聞あり、終には「皇太后降嫁」の詔が發せらるゝに至つた。太后といへば天子の母である、天子の母が人臣に下嫁せられたといふことは、支那史上未曾有の破例である。此詔書は明の降臣で詩人錢謙益の筆になり、實に典麗莊重を極めたものである、其略に曰く

朕天下を以て養ふと雖も、而も太后春秋鼎盛なり、子焉として偶なくんば、春花秋月悄然として怡ばざらむ、今以ふに、皇叔攝政王は、周室の懿親、元勳の貴冑なり、克く徽音に配せば、永く休美を承けむ」云々

爾來九王は「皇父」と尊稱せられた。玉妃、大詔により天下晴れて降嫁し、九王は其限り無き寵眷に浴し、一人を以て獨り其衝に當り、玉妃に媚び、餘勇を戲し復た私かに　さしもの九王も荒淫度なかりし爲め三十六七になつてから力支ゆること能はず人參、鹿茸、肭臍腎等のあらゆる補劑を用ゐたが著しき効果もなく、日一日と衰弱して行くばかりであつた。此時に當つて王に一策を献じた好事者があつた。「喇嘛西藩に在り、向きに興奮藥を以て其術を神にす、今聞く其囊中に奇藥多し」といふ意味を白して、之を索めて用ふれば効驗があると薦めた。九王は直ちに使を派し喇嘛僧に向つて此旨を述ぶると、喇嘛は先づ皇父が喇嘛教に歸依し親しく之を祭るにあらずば、此藥は到底求むることが出來ぬと、巧に持掛けたので、九王は直ちに壇を宮中に設けて淫殺の神を祭るやうになつた。

此奇藥を得るまでがなかなか手數を要する、先づ壇を設けて、牲牢、樽俎、金豪、銀盞等具さに豐典を極め、終日鐘、太鼓其他の樂器を打ち鳴して嘶し立てる。夜に入ると、神燈を星の如くに輝かし、參列する喇嘛百八人、これが一齊に經を誦して壇を繞る、その間

は唱の經の聲と、樂音とが混和して、屋根裏も拔けんばかりである、斯くの如くにすること三日三夜、方めて壇の中央に淨瓶一を置く、瓶の大さ牛膽の如く、膠皮紙を以て其口を封固し、紙上に符籙狀を載せて置く、斯の如くにして喇嘛は經を誦しながら壇を繞ること良久しくして、柱錫を持つて身構へをなし「イヤツ」と一聲氣合をかけると、色赤くして丹砂に似たる小粒が二つ現はるゝ、それが喇嘛の奇藥で名けて「子母丸」又は「阿肌藏丸」ともいふもので、昔し達賴第一世の坐牀の時、此丸を以て金瓶の中に置いて之を第二世に傳へ、其後世々傳はつて居る天下の珍藥である。

喇嘛はこの藥を九王に示して云ふには「此藥は自から生息して永久不滅である、大功德の佛緣ある者が經壇を設けて誦咒すること三日、斯くて淨瓶の中に此丸を納め、復た謹んで祝すること七日、更に淨室の中に移置すること三七日、斯くして始めて其封を啓くと藥が必ず中に滿ちて居る、此丸靈驗異常、量を計つて用ゆれば如何なる難症も立處に全癒する、到底人力の配製すべき所でない」と、九王唯々として其言の如くにした。而して淨室の內外は日夜嚴重に侍臣に守護させ、喇嘛は勿論のこと、斷じて人の出入を禁じた。斯くて期到ると、アナ不思議や丸藥瓶に滿ち滿ちて其數百餘粒に增して居た。九王が試に之を用ゆるに神采煥發、精力大に振つたので悅ぶこと甚しく半歲ならずして悉く飲み盡して了つた。それより後一月を經ると又忽ちにして委頓したので喇嘛を呼んで更にこれを求めんとしたが、今度は喇嘛は斷乎として拒絕した。

其の斷つた理由といふのは、此靈藥は「子母」と名づく、母があつてこそ始めて子を得ることが出來る、母までも飲み盡して了へば如何に壇を設け法を作すと雖も効なし、其の母藥は今一個西藏なる達賴法王の庫中に在るのみである、西藏までの往復は一年を要するから到底間に合ぬといつた。九王は强いて喇嘛を出發させたが、其歸らざる內に身體頓に衰弱して終に馬より墜ちて死んで了つた。色を好む者は必ず藥を以て死すとは、古人の言良とに誣ひない。九王と奇藥とはこれで局を結んだが、此事あつて以來非常な評判となり宮室は勿論、民間でも此奇藥を無類の珍寶として尊重し喇嘛に接近する者が多くなつたと

いふ。歡喜佛の崇拜と、此奇藥を思ひ合せて考ふると、讀者は何物かを得るであらう。數町をはなれた文天祥の祠を訪ふ者は少なくとも、雍和宮には參拜者、絶間なきを觀ても首肯さるゝ點が多い。今現に彼等の間には奇怪極まることが行はれて居るが、何れ「支那の宗教」を刊行する時に讓ることにする。

喇嘛の秘藥は勿論直ちに信ずべきものではないが、秘藥に關する逸話として見れば、甚だ興味深いものがある。次に支那の諸書から此の秘藥に關する逸話と云ふのを數種引用紹介して置いて、其の後で實際的の秘藥處方を並べて見やう。

「飛燕外傳」 漢、伶元著

漢の成帝が腎虚になつて奇藥を求めた。其の時、脊卹膠(しせきじゅつこう)と云ふ秘藥を得て、遂に其の服用を誤つた爲死を早めたと云ふ記述がある。次に其の部分の譯を載せる。

「帝緩弱を病み、大醫萬方、救ふ能はず、奇藥を求め、嘗て脊卹膠(1)を得て昭儀を遣る。照儀輙ち帝に進む。一丸一幸す。一夕照儀醉ひ、七丸を進む。帝昏夜照儀を擁して九成

帳に居り、笑ひて吃々として絶えず。須臾にてして帝崩ず。宮人以て太后に白す。大后照儀を理めしむ。照儀曰く、吾れ人主を持すること嬰兒の如く、寵天下を傾けたり。安ぞ能く手を掖庭に斂めて、帷帳の事を爭はしめんやと。乃ち膺(よう)を拊ちて呼んで曰く、帝何ぞ往きしやと。遂に血を嘔きて死せり。(國譯漢大成。晉唐小說)

(1) 脊卹膠とは　の事。

これは前に出た、九王が喇嘛の秘藥阿肌藏丸を呑み過ぎて死んだと同じで、快樂の爲には死をも怖れない支那人氣質がよく現はれて居る。

それから例の**「京本通俗小說第廿一卷」**に處方は無いが、數種　の名が出て居る海陵王最初の寵妃阿思虎が幼時、父が　を作るのを見て、ひそかに女中に聞く所がある

「照妃阿思虎。性蒲察氏。駙馬都尉沒里野女也。生而妖嬈嬌媚。嗜酒跌宕。初未嫁時。見其父沒里野。修合美女顫聲嬌。金鎗不倒丹。硫磺箍。如意帶等　不知其何所用。」

それから阿里虎は初め宗皇の子、阿虎に嫁したが、娘の重節を生んで、七才になつた時

阿虎は誅せられ、阿思虎は喪の閉ぢるを待たず、重節をつれて、宗皇の南家に再嫁した。南家は善淫で、里虎も亦、父の驗した　　を作つて、

遂に南家は髓竭きて死んだ。（雜論グロテスク。第二卷第一號。「京本通俗小說」）

『金瓶梅』第四十九回。

請巡按屈體求榮。　遇梵僧現身施葯

の中に、西門慶が鹽務巡按史に任ぜられて來た蔡狀元をもてなしてから、翌朝二人で城外の永福寺に出掛けて行つた時、大道場に坐禪して居る多くの僧侶の中に一個和尙、形骨古怪、相貌擻搜、生的豹頭環眼と云つた異相な僧の居るのを見て、奇異に思ひ、其の名を聞くと、西域天竺、密松林、齊腰峯、寒庭寺から來た梵僧で施藥濟人をなすものである事が解つた。

其處で西門慶は大に喜び、では貴僧には　　を御所持になるかと聞くと、我有我有と答へる。そんなら私の家へ來て下さいませんかと更に問ふと、我去我去と云つた。

西門慶は家へ歸ると、其の日は丁度四月十七日で李嬌兒の誕生日だつたので、梵僧を大廳へ招じ、山海の珍味を出してもてなした。

それから西門慶が改めて　　を求めると、梵僧云ふ。

「我れ一枝の藥あり、乃ち老君煉就、王母方を傳ふ、人に非ざれば度せず、人に非ざれば傳へず、專度有緣、官人我を厚く待つによつて今幾丸を得ん」

卽ち一個の瓢簞を取り出し、傾けると秘藥が百十丸あつた。

呑みそれ以上決して多く用ゐてはならんと戒しめた。猶一個の瓢簞から粉紅膏二錢一塊を出し、

汝これを用ゐて、濫りに人に語つてはならぬ、と云つた。

其處で西門慶は歡喜してこの藥を受け取り僧に問ふて曰、

「此の藥の効能は如何？」

梵僧これに答へて曰、

「形如雞卵。色如鵝黃。三次老君炮煉。王母親手傳方。外視輕如糞土。內貴覿乎琅玕。比金金豈換。比玉玉何價。任儞腰金衣紫。任儞大厦高堂。任儞輕裘肥馬。任儞才俊棟梁。此藥用托掌內。飄然身入洞房。洞中春不老。物外景長芳。玉山無頹敗。月朗夜窓光。一不拘嬌艶寵。十世美紅妝。　徹夜硬如鎗。脂久寬脾胃。滋腎又扶陽。百日鬚髮黑。千朝體自强。固齒能明目。陽生垢始藏。恐君如不信。拌飯與猫嘗。　四日熱難當。白猫變爲黑。尿糞俱停亡。夏月當風臥。冬天水裡藏。若還不解泄。　其精永不傷。老婦擎眉蹙。　有時心倦怠。收兵罷戰場。冷水呑一口。　贈與知音客。永作保身方。」

いやはや實に大變な藥があつたものだ。とに角淫人西門慶が此の秘方を得たのだから正に鬼に金棒だ。

第五十回になると、西門慶此の秘藥を携へて、王六兒の所へ出掛け、早速試みた。

「原來西門慶用燒酒。把梵僧藥吃了一粒下去。　坐在牀沿上。　先把銀托束其根來。　使了硫磺圈子。又把梵僧與他的粉紅膏子藥兒。盛在個小銀盒兒內。揑了有一厘半兒。安放在馬眼內。　露稜跳腦。凹眼圓睜。橫肋皆見。　比尋常分外粗大。西門慶心中暗喜。果然此藥。有些意思。」

秘藥の効能は顚面に利いて、西門慶も王六兒も　然し西門慶は梵僧の　の力衰へず、更に李瓶兒の　奇藥の偉力を一層裏書させた。

これより回を追ふに從つて西門慶の　行き止りなく發展する。それが西門慶貪慾喪命。吳月娘喪偶生兒迄續いて、此の回で遂に命を墜すと云ふ結果になるのである。又も王六兒の所で梵藥を

用ゐて　　グタ〳〵に醉つて金蓮の部屋へ歸つて來て、死んだ樣に寢て仕舞つた。それを金蓮が無理に引き起して、適量以上の秘藥を呑ました爲に、流石の西門慶も天命此に盡きる。金蓮問曰。

「因問ニ西門慶ニ、和尙の藥はどこにあるの?」

然し西門慶は面倒がつて、仲々起きない。然しあくまでも

る事を承知せず、彼の持つてる秘藥の盒を見つけ出して、蓋を開けて見ると、丸藥が三四粒あつた。で、彼女は自分に　　西門慶へは

て仕舞つた。斯くして金蓮の爲に、不知不識の間に梵僧の戒を破り、それが爲に腎虛となる狀を左に……

「婦人取過燒酒壺來。斟了一鍾酒。自己吃了一丸。還剩下三丸恐怕力不效千不合萬不合拏燒酒都送到西門慶口內醉了的人曉的其麼合着眼只顧吃下去那消一盞熱茶時

來婦人將白綾帶子栓在根上那話躍然而起婦人見他只顧睡於是騎在他身上又取膏子藥安放馬眼內頂入牝中只雖揉擦那話直抵苞花窩裡覺翕翕然渾身酥麻暢美不可言又兩手據按一起一坐那話沒稜露腦約　　初時澁滯次後　　稍沾滑落西門慶繇着他掇弄。只是不理。婦人情不能當　　於西門慶口中。　　他脖項。　　慶柄沒至根。止剩二卵在外。用手摸着妙不可言。　　此時三鼓凡五換帕。婦人一連丟了兩次。西門慶只　　一般害箍脹的慌。令婦人把根下了還發脹不已。令婦人用口吮之。這婦人扒伏　　用朱唇。呑裹其　　只顧往來不已又勸勾約一頓飯時。那管中之精　　瀉筒中相似忙用口接嚥不及。只顧流將出來。初時還　　出來再無个收救。西門慶已昏迷去」

あはれ一代の遊蕩兒、支那人の理想たる彼西門慶。三十幾つの盛りで斃れたとは云へ、あれ程思ふまゝに振舞つたのだから、さう大して殘り惜しい事もなかつたらうと思はれる。何度云つても金瓶梅は傑作である。紅樓夢と共に支那の人間生活を遺憾なく描破し盡して居る。主人公西門慶に至つては、古今何千年間の支那民衆が持つ熱烈な希望を、打つて

一丸となした様な男で、富貴、强壯、美貌を兼備して、あらゆる　然し彼はカサノヴやドン・ジュアンの様に貴族的ではない。これ等西洋のダンディストは戀愛を遊戯と觀じて婦女子を弄ぶと云ふ氣持が大量に含まれて居る。然るに彼西門慶に至つてはあらゆる支那人がそうである通り、性慾は生命である。彼が吳家の李瓶兒を娶つたのは、吳家遺産を覘つたにもよるが、李瓶兒其の者に對する愛着も非常にあつた。彼は隨分澤山の婦人と關係して居る。それが皆性慾と金慾との混合から來て居る。其の點甚だ物質的で生活を眞正面から享樂する支那人氣質を萬遍なく發揮して居る。彼にはドン・ジュアンやカサノヴに見られるニヒリスチツクな思想がない。

飽くまでも西門慶はリアルな人物であり、金瓶梅もリアリスチツクな作品である。神怪思想で固まつて居る支那人の一面には又斯うした大きな現實性がある。西門慶は屢々、王六兒潘金蓮等に對して　ゐるがそれ等は皆實在性を多分に持つもので、決して作り話の感がしない。他書に見る様な神變不思議な魔法的秘藥を用ゐるのではない。兎に角、彼程の　全く批評を超越したもので、斯くまで突きつめた生活力の偉大さには、ホト〳〵嘆服せざるを得ないのである。

次は『繪圖隋煬豔史』の第三十二回

方士進丹藥。宮女競冰盤。

隋の煬帝の淫蕩はあんまり有名すぎる。其處で迷樓中の歡樂等の叙述ははぶき、帝が方士の丹藥を得て、　紹介しやう。

「ある日、帝は蕭后等を連れて、楊州名物の瓊花を見に行つた。所がまだ十分觀賞せぬ內に、滿開の花が忽ち散り始めて、忽ち大地を白く埋めて仕舞つた。こんな事で散々氣嫌を損じた帝は此の靈木を根こぎにさして、不興のまゝ歸る途中、一人の道士が道を遮つたので大騒ぎとなつたが、結極其の道士が世にも稀れな　煬帝に献上する

事になる。原文では、

俺道人在二山中一。無事偶採二百花一。合了一種丹藥。要救度世人。故此信步來賞。煬帝道。丹藥有二何好處一。道士道。固精最妙。

共處で帝は大喜して此の丹藥を受けるに、道士は小さな瓢箪から幾粒かの丸藥を出して與へた。馬鹿に小さな丸藥だが、これで利くものかと不審がると、丹藥は一粒で結構だ。無くなつたら又取りに來なさいと云ひ捨てゝ道士は東方へ去つて仕舞つた。

迷樓へ歸つた煬帝は早速丹藥を一粒取り出して手に乘せると、手がまるで鐵のやうに堅くなり。放到舌上。渾如一團冰雪。即ち丹藥の効能は實に偉大なものがあつた。

それより以後帝は

煬帝與衆美人。
不可言。不期幾粒丹藥。喫完了。精神便依舊消索。

で更に丹藥を得る爲に人を道士の所へ遣したが、道士を見付け出す事が出來なかつた。侍臣は止むなく歸つて其の旨を奏し、觀門を出て不圖氣づくと、對門の壁に一人の道士の畫が描いてあつて、顏と云ひ、服裝と云ひ、かの丹藥を献じた道士そつくりである。其の傍に四句の詩が書いてあつたので、それを寫し取り、帝に見せると、その詩は、

治世休誇天子尊。須知方外有玄門。
贈君十粒靈丹藥。消盡千秋浪蕩魂。

それから煬帝は無性に仙藥を信仰して、方士道士の怪しげな丹藥を集め、見境もなく亂用したので、身體は忽ち變調を來し、遂には致命傷の病源となつて仕舞つたのである。

『杏花天』是は讀んで最も面白い本で、風流才子悅生なるドン・ジュアンの物語である

第二回　封悅生遇師求方。萬衲子

「悅生が萬衲子から久戰三子丹と云ふ秘藥を授かる。我今汝に授く。

此の藥は二十四丸を以て限度とする。

丸を呑下し、

藥の處方は、

兎絲子、

猶老師は次の様な素晴しい

春紫燕北より來り、梁間に巣喰ひ下卵す。其の内に雛が卵から出るのを覗ひ、其の巣の入口を泥で塞いで仕舞ふ。かくして三日の後に靜かに巣を取り下し、巣の泥を拂ひ去つて、巣の中を見ると、雛は死んでゐる。頭を外方に向けたもの、内方に向けたものとを區別して、外方に頭を向けたものを包んで其の上に（外）と云ふ字を書き、内方へ向けて死んだものは包みの上に（裡）と云ふ字を書く。その二包を一個の鑵に入れ、口を封じて、人の通らぬ十字路に埋め瓦で蓋をして置き、七日間秘咒する。かくしてそれを取り出し來り陽陰の瓦（不明）を以て焙き、兩方とも粉末となし、（外）、（裡）の粉末を覺へて置く、さて此の秘藥を用ゐるには、右手の中指で、（裡）と書いてある方の藥をつけ思ふ女に彈きかければ、其の夜女の方から忍んで來ると云ふのである。

悅生斯うした　　あらゆる

は、げにも凄ましいものがある。

後藤朝太郎氏の**「不老長生」**米田祐太郎氏の**「支那媚藥考」**は吾々にとつて大變にいゝ參考書である。**「不老長生」**の中には藥酒の事や鹿の角の事などが委しく說明してある。參照あり度い。**「支那媚藥考」**には。回春と不老長生の條下に百種類の粥法が擧げてある。食物養生では世界に冠たる支那の料理がうかゞはれて面白い。（これは長文で引用出來ぬから同書を參照せよ）

雲母を鍊化して、五年連服すれば仙を得。食玉之秘方、これは玉を烏米酒と地楡酒とで液化して呑むとある。丹砂、胡麻、松實、杏金丹、桃膠なんかと云ふ秘方が澤山集めてある。

次には**「醫心方」**卷第廿八　　の第廿六用藥石より色々の處方を引用する。

▼千金方云。

采女曰。　　敢問服二食藥物一何者亦得而有レ効。彭祖曰。使レ人丁强不レ老。　　氣力顏色不レ衰者。莫レ過二藥角一也。

其法。取二藥角一刮レ之爲レ末十兩。輙用二八角生附子一枚一合レ之。服二方寸匕一日三大良。亦可下煑二藥角一令二微黃一單服上レ之亦令二人不レ老。然運緩不レ及下內二附子一者服上レ之。廿日大覺。亦可レ內二隴西頭伏苓一分等擣篩服二方寸匕一日三。令二人長生　（今案二玉房秘訣一同レ之。）

▼又云。治二痿而不レ起。起而不大。大而不長。長而不熱。熱而不レ堅。堅而不久。久而無精。精薄而冷一方。

縱容。鐘乳。蛇床。遠志。續斷。薯預。鹿茸。

右七味各三兩。酒二服方寸匕一日二。　欲レ堅倍二遠志一。欲レ大倍二鹿茸一。

倍二鐘乳一。（今案二迎齡圖一云。等分廿九日三服）

▼玉房秘訣云。治二男子陰委不起。起而不强。就レ事如レ無レ情。此陽氣少腎源微也。方用。

縱容五味（各二分）。蛇床子。菟糸子。枳實（各四分）。

右五物擣篩。酒二服方寸匕一日三。蜀郡府君年七十以上復有レ子。

▼又方。

雄蛾未レ連者干レ之三分細辛蛇床子三分擣篩。雀卵和如二梧子一　服二一枚。若强不レ止以レ水洗レ之。

▼玉房指要云。治二男子一欲レ令下健作二房室一一夜十余不上レ息方。

蛇床。遠至。續斷。縱容。

右四物分等爲レ散。日三服二方寸匕一。

▼洞玄子云。

禿鷄散。治二男子五勞七傷　蜀郡大守呂敬大年七十服藥得レ生二三男一長

服レ之。夫人患二　不レ能二座臥一。卽藥棄二遲中一。雄鷄食レ之。卽起上二鵝鷄其背一。

連日不レ下。喙二其頭冠一。冠禿。世呼爲二禿鷄散一。亦名二禿鷄丸一方。

完縱容三分。五味子三分。兔糸子三分。遠志三分。蛇床子四分。

凡五物擣篩爲レ散。每日空腹酒二下方寸匕一。日再。三無レ敵不レ可レ服。六十日可レ御二世婦一。

又以白蜜和丸如梧子。服五丸日再以知爲度。（今案千金方有八味。蛇床子三分。兔糸子二分。縱容三分。遠志二分。五味子二分。防風二分。巴戟天二分。杜仲一分）

▼又云。

鹿角散。治男子五勞七傷　卒就婦人　中道痿死。　出小便余瀝。腰背疼冷方。

鹿角。栢子人。兔糸子。蛇床子。車前子。遠至。五味子。縱容（各四分）

右擣篩爲散。每食後。服五分七日三。不知更加方寸匕。

▼苑汪方云。

開心薯預腎氣丸。治丈夫五勞七傷。體極不耐寒。眠卽臍脹。心滿雷鳴不欲飲食。雖食心下停談不能消。春夏秋冬兩脚淩冷。虛多忘腎氣不行。　絕如老人。服之中補髓塡虛養志開心安臟止淚明目寬胃益陰陽除風去冷無所不治方。

完縱容一兩。山茱萸一兩（或方無）。干地黃六分。遠志六分。蛇床子五分。五味子六分。防風六分。茯苓六分。牛膝六分。兔糸子六分。杜仲六分。薯預六分。

凡十二物擣下篩。蜜丸如梧子。服廿丸日二夜一。若煩心卽停減之。只服十丸。服藥五日　十夜通體滑澤。十五夜顏色澤。常手足熱。　廿五夜經脉充滿。卅夜熱氣朗徹面色如花。手文如絲而心開記事忘。去愁上忘。

年卅以下一劑卽是。五十以上兩劑。滿七十亦有子。無所禁忌但忌大辛酢。

完縱容丸。治男子五勞七傷。　癢濕小便淋瀝。溺時赤時黃。服此藥養性益氣力令人健。　起。起而不堅。堅而不怒。怒而不洪。

入便自死。此藥補精益氣力。令人好顏色肥白方。

完縱容。兔糸子。蛇床子。五味子。遠志。續斷。杜仲（各四分）

右七物擣篩。蜜和爲丸。如梧子。平日服五丸日再長跪東向面。不知藥異至七

丸。服之卅日知。五十日
令洪大加縱容。腰痛加杜仲。
時。數用有驗。無婦人不可服。禁如常法。
遠志丸。
續斷四兩。蓴預二兩。遠志二兩。蛇床子二兩。完縱容三兩。
凡五物下篩。和雀卵丸如豆。旦服五丸日二。百日長一寸。二百日三寸。

▼錄驗方云。

益多散。女子臣妾再拜上書皇帝陛下。臣妾頓首々々。死々罪々。愚聞上善不忘君。
妾夫華浮年八十　　從所知得方。方用。
生地黄（洗薄切一升以清酒漬令浹々萬千搗爲屑十分）。桂心一尺（准二分）。甘
草五分炙。求二分。干□（不明）五分。
凡五物搗末下篩治合。後食以酒服方寸匕日三。
不怒加遠志。少精加五味子。欲
所加者倍之。年八十老公服之如卅

華浮合此藥未及服之沒。故浮有奴。字益多。年七十五。病腰屈髮白横行傴僂。
妾憐之以藥與益多。服廿日腰伸白髮更黑。顏色滑澤狀若卅時。妾有婢字番息謹善
二人益多以爲妻生男女四人益多出飲酒醉歸。趣取謹善々々在妾傍臥。益多追
得謹善與交通。妾覺偷聞。多氣力壯勁又巍異於他男子。妾年五十　　而解怠
不識人。不能自絶斷女情爲生二人。益多與妾番息等三人。　　無極。時妾
識耻與奴通。卽愍益多。　　有黄髓更充滿。是以知此方有驗。陛下御用膏
隨而滿君宜良方。臣妾死罪稽首再拜以聞。
どうも支那には斯う云ふ勇敢無比な女があるのだから降參だ。皇帝もさぞ滿悅で御嘉納
遊ばされた事であらう。

▼標要方云。 療大夫欲健　　百倍勝。常多情益氣　　得熱而大上方。
蛇床子二分。兔絲子二分。巴戟天皮二分。肉縱容二分。遠志一分（去心）。五味子一
分。防風一分。

己上爲散。酒服半錢許一廿日益精氣。

▼竹氏方。

治无復人道方。

完縱容。蛇床子。遠志。續斷。兔糸子（各一兩）

擣末酒服方寸匕一日三。

▼又云。

若平常自强就接便弱方。

蛇床子。兔糸子。末酒服方寸匕一日三。

▼耆婆方云。

苟杞。昌蒲。兔糸子各一分。

合下篩以方寸匕服日三。

▼又方。

早旦空腹。溫酒內好蘇飲之。

▼又方。

單末蛇床子酒服之。

▼蘇羅法師流觀秘密要術方云。大唐國滄州景城縣法林寺法師惠忠傳曰。法藏驗記曰。如來爲利衆儲此方。衆生不覺不願。是以無周知。龍樹馬鳴難說佛敎之日纔悟此藥卽傳沙門。沙門恂不傳。因無有世間利王。王西天竺國之時。東婆台人名阿蘇高尺有二寸。乘風飛來。獻十二大願三秀祕密要術方。王龍視儲旨藥師如來敎喩儲也。王好時治術乃得驗歷數之。外更承廣運封十六大國。妃各爲芳約悅一適勝莫兩心奸魏々乎德。蕩々乎仁。千金莫傳。

▼新羅法師秘密方云。

八月中旬取露蜂房置平物迫一宿宿後取內生絹袋懸竿陰干十旬。限後爲妙藥。

夫望二覆合時一割二取錢六枚許一內二清埴瓮一煎過二黑炭一成二白灰。卽半分內二溫酒一呑。內レ手以レ唾和塗レ罅　俄乾々了。覆合任レ心服。累二四旬一漸皎驗。終二十旬一調レ體了。迄二終身一無レ損有レ益。福德復萬倍氣力七倍。所レ求皆得無病長命。盛夏招レ冷。隆冬追レ溫。防二邪氣一不レ遭レ殯。所レ謂增益之積。罅縱廣各百八十銖。寸。屎自成レ香。縮二之器一男女精神心敏。耳聰目明口鼻香。若求レ强者內二溫酒一常呑。求レ

服中禁忌（大哀、大悅、大驚、大怒、大坂、汗奔、洪流、危高、五辛、董冷、生菜、醉酒、）

▼**葛氏方云。**

取レ水銀一鹿茸巴豆一雜搗末和調。以二眞藥脂一和。　若脂强以二小麻油一雜煎此不レ異二闘人一。（今案單末二水銀一塗二之

▼**又方。**

蘇敬本草注云。

鹿脂不レ可レ近二

陶景本草注云。

芰實被霜之後食レ之令二陰不レ强。

同書の同卷、第廿七は

▼

治二男子一令二

（今案此穴在二內踝上八寸一。）

栢子人五分。白斂四分。白求七分。桂心三分。附子一分。

右五物爲レ散。食後服二方寸匕一日再十日（此の間脫字あらん）。

▼

欲レ令二

蜀椒。細辛。肉縱容。

凡三味分等冶下篩。以內狗膽中懸所居屋上卅日。以磨

▼洞云子云。

長

肉縱容三分。海蔘二分。

右擣篩爲末。以和正月白犬肝汁。

同書同卷第廿八玉門大。

▼

令

流黃四分。遠志二分。

爲散。絹囊盛著

又方。

平旦新汲水洗却。卽長

硫黃二分。蒲華二分。

爲散。三指撮著一升湯中

▼洞玄子云。

廿日如未嫁之僮。

療婦人　急小

石硫黃三分。青木香二分。山茱萸二分。蛇床子二分。

右四味擣爲末臨

▼又方。

不得過多。

取石留黃末三指撮內一升湯中

▼錄驗方云。

急如十二三女。

令婦人

青木香二分。山茱萸四分。

凡二物爲散。和豚如小豆內

同書同卷第廿九少女痛。

▼**集驗方云。**

治下童女始　及爲二他物所一傷

燒二亂髮幷青布一末爲レ粉粉レ之立愈。

又方。

以二麻油一塗レ之。

又方。

取二釜底墨斷レ葫蘆磨以塗レ之。

▼**千金方云。**

治二小戸

烏賊魚骨二枚燒爲レ屑。酒二服方寸匕一日三。

又方。

牛膝五兩以二酒三升一煮再沸去レ滓分三服。

▼

治二婦人初交傷痛積日不一歇方。

甘草二分。苟藥二分。生薑三分。桂十分。水三升煮三沸一服。

同書同卷第卅長婦傷。

▼

女人傷二於夫　疼痛一方。

桑根白皮切半升。干薑一兩。桂心一兩。棗廿枚。

以二酒一斗一煮三沸服二一升一勿下令二汗出一當レ風。亦可レ用二水煮一。

▼**集驗方云。**

治下女子傷二於丈夫一四體沈重虛吸頭痛上方。

生地黃八兩。芍藥五兩。香豉一升。葱白切一升。生薑四兩。甘草二兩炙。

各切。以二水七升一煮取二三升一分三服。不レ羨重作。

▼千金方云。

治下　輙痛不上レ可レ忍方。

黄蓮六分。手膝四分。甘草四分。

右三味水四升煮取二二升一洗レ之日四。

▼劉涓子方。

女人

桂心二分。龍伏肝三分。

二味酒二服方寸七一日三。

次に紹介する**「蘭房秘訣探戰春方」**これは某氏から頂戴した寫本だが、私も未見のもので何時の時代の作かよく解らぬ。然し仲々面白いし、如何にも　らしい名稱の藥が澤山あげてあるから、其の點で興味深いものだから全部原文のまゝ轉載した。讀み易いものだから句讀の必要はないだらう。

此書所載處方の內、金屋得春丹は石榴皮と菊等分の洗滌藥だが、よく利くと見えて、眞に春宵一刻千金之美とは喜しい書き方だ。それから次の安祿山徹夜恣情敎。次の隋煬帝幸群女遍宮春。最後の楊妃小浴盆は處方藥の分量など多少の違ひはあるが、そのまゝ英泉の大作**「枕文庫」**の中に引用してある。日本の秘藥の所に**「枕文庫」**は引用してあるから、比較して見て戴き度い。

蘭房秘訣探戰春方

藥性歌

洞房何藥可興陽海馬相兼石燕强蛤蚧丁香共巴戟熟地茱萸五味良堅强更有破故紙能令快味羨蛇床硫黃性熱宜輕用木香麝香要參詳人龍木鼈絲瓜子乳香沒藥是奇方遠志紫稍堪動興桂心晁腦白礬添栢子鹿茸香附子洞房徹夜可追歡蜂房細辛地龍等陰陽並美乃仙傳狗骨乾姜和

定粉相思美婦不能忘花椒沉香鬼絲子杏仁草麻共茴香石灰胡椒烏骨膽金櫻蒼求酸棗當人蔘
茯苓能大補乾姜三奈菊花凉蓯蓉木香龍骨石榴皮妄用心煎同蝎紅花鍼山藥阿子砂仁與姜蠶
狐心乾葱陽起石硃砂五倍瓦松同蠶蛾蠶香川牛膝川芎甘遂白砂霜封臍紅蜻蜓二個更兼縱妙
安息香此是洞房神妙藥春方配合若遇仙。

▼**二益丹。**

髮黑膽嫩眼目聰儀容標格倍精神三盃酒後紅顏潤採戰先令勳欲情　凡採戰不得其人切勿輕
用無益而有損。

▼**美女倒提金方。**

硫黃　吳茱萸　青木香　硫香　各等分

右爲細末每用唾津調入陰戶極美。

▲**靈龜展勢方。**

人龍一條　乳香二分　沒藥三分　遠志二分　金絲鱉子三分去油　絲瓜子七個　木鱉子

五分。

右爲細末油胭脂爲丸如棗粒大臨戰時用一粒入馬口內靈龜長大妙。

▼**合歡散。**

紫稍花一錢　母丁香三錢分　桂心二錢

右爲細末每用少許津調入

▼**美女顫聲嬌。**

白礬三錢　晁腦一錢　蛇床子二錢　木香一錢

右爲細末煉蜜爲丸如黃豆大每一丸入　其妙不可言。

▼**興陽保腎丹。**

桂心三錢　附子三錢　柏仁子五錢　鹿茸四錢

右爲細末春夏煉蜜爲丸如梧桐子大每服三十丸早晚溫酒送下秋冬月每服三錢溫酒調用早晚
服此藥大助陽盛保護腎大

▼楊妃夜夜嬌。

蛇床子　蜂房　五味子　地龍各等分

右爲細末每用少許津調抹　其効非常。

▼快丸丹歌曰。

仙翁配合快情方狗骨桂心與蛇床更加定粉相調治美思情誓不忘。

蛇床子二錢　狗骨燒灰一錢　定粉一錢　桂心一錢

右爲細末每用少許津護　女情雖暫離亦不能捨也。

▼長相思歌曰。

木鼈乾姜及桂枝花椒狗骨兩相宜津調一服安　不思。

右方。

木鼈子五個　乾姜一錢　桂枝三錢　花椒一錢　狗骨灰三錢

均爲細末煉蜜爲丸如梧桐子大每服一丸津調化付

▼怡情固精丹。

五味子　遠志　木香　蛇床子各等分　神固精也。

右爲細末每用少許津調付

▼壯陽益腎丹。

沉香　乳香　木香　浚藥　兎絲子各五錢　大茴香一錢　破故紙五兩酒浸　核桃四十個

去殼

右爲細末煉蜜爲丸如梧桐子大每服三十丸空心溫酒送下服久能令

矣。

▼早苗喜雨膏。

杏仁　丁香　草麻子　白礬非止以上各二錢

右爲細末用蟾酥并煉蜜爲膏調付　歡洽矣。

▼飛燕喜春散。

丁香　香附子　石灰末　胡椒　烏魚骨　鹿茸　金毛狗脊各五錢　蛇床子　紫稍花　兎絲子各錢　麝香三分

右爲細末煉蜜爲丸如梧桐子大每服一丸津化　歡洽欣喜不勝二美相並也。

▼西施受寵丹。

丁香　附子　良姜　官桂　蛤桂各一錢　白礬飛　硫黃　山茱萸各七分

右爲細末煉蜜爲丸如梧桐子大每服三丸空心溫酒送下雖敵　羅其美如歡洽也。

▼眞人保命丹。

酸棗仁　人參　白茯苓　天門冬酒浸新瓦焙干各三錢

右爲細末每服三錢溫酒臨臥調服可敵百婦大能保腎延年眞仙藥也。

▼素女遇旬母。

母丁香　蛇床子　白茯苓　甘松　白礬　山茱萸　肉蓯蓉　紫稍花各五錢　細辛二錢半　麝香五分

右爲細末煉蜜爲丸如梧桐子大每用一丸津調塗　健暢美若遇仙美。

▼美女一笑散。

青木香　龍骨　山茱萸　蛇床子　遠志　官桂　石榴皮各等分

右爲細末每次少許男津調入女戶行九淺一深之法女情歡美四肢困懈情不能已也。

▼金屋得春丹。

石榴皮　菊花各等分

右爲細末水一椀煎七分溫洗　童女眞春宵一刻千金之美。

▼歷代仙聖集古効驗春。

綠珠進石崇延壽補益湯

夜有　勞神明早服北大有補益。

人參　黃芪蜜水拌炒　白朮炒　杜仲炒去糸　牛膝　白芍炒各一錢　甘草六分　當歸酒浸焙干　陳皮七分　柴胡五分　知母八分　五味子十二粒　熟地酒浸焙干二錢

右爲一劑水二鍾紅棗一個煎七分空心服大有補益。

▼安祿山

膽酥二錢　胡椒二錢　乾桂三分　射香三分

右爲細末以二三厘用唾津子前午後調　一夜不泄久久藥自散不必解。

▼隋煬帝幸群女遍宮春。

呵芙蓉二錢　膽酥一錢　硃砂五分

右爲細末以二三厘津如前法妙極。

▼秦宮朱后浴盆雙妙丹方。

細辛　川椒　蛇床子　梨花　甘草　茱萸　附子各一兩

右爲末水石碗煎濃連根葱一握搗碎投入無風處添水男女盡身並洗大壯陽縮陰。

▼太平公主萬壑嬌。

遠志去心二錢　蛇床子一錢　五倍子一錢　雙美曜仙秘藥方歌曰。

右爲細末以二三厘津調粒末　斷腰。

七粒丁香八粒椒細辛龍骨海漂硝枯礬少許蜂　甚妙。

右爲末煉蜜爲丸梧桐子大行事納

▼高衙內秘錄自送佳期求配方。

麝香　三奈　川芎　丁香各一錢　射香五分　蠟具狐心二個瓦上焙乾春性

右爲細末少許　即至。

▼元順帝御製金鎗不倒方。

丁香　姜蠶各二錢　陽起石　木香　乳香各三錢　乾葱一根

右爲細末酒糊爲丸桐子大每服三丸溫酒呑下寅夜不泄冷水解。

▼史國公廣嗣方。

蛇床子　木別子去殼　良姜各等分

右爲細末煉蜜丸梧桐子大　不過三次有朶。

▼**密始皇識嬪妃操守方。**

擦陀僧　乾胭脂　硃砂各等分

右爲細末蝙蝠血調擦身上遠年不退與人　妙驗如神。

▼**樂安宮主如花夜夜香**

木香　沉香　甘松　合香　牡蠣　龍腦　龍骨　附子　飛礬　烏魚骨各五錢　胡椒　百圭　零令香各一錢　射香一錢

右爲細末煉蜜爲丸桐子大每服一丸　室女。

▼**薛敎曹進武則天皇后自美方。**

韶粉一錢二分　蛇床子一錢　白礬一錢五分　紫稍花一錢　木香五錢　川椒五分　吳茱萸一錢

右爲細末煉蜜爲丸每桐子大每服　甚快。

▼**漢武帝御製遍宮思。**

川芎　南木香　山枚　薄荷　細辛　天麻子　白芷　防風去殼　砂仁各等分

右爲細末煉蜜爲丸每一兩分做十丸每服一丸空心溫酒送下連服七日歇一日再服　七日後任意行之　用紅棗湯解。

▼**姐姬潤戶方**

石榴皮　菊花　白礬各等分

右三味水二鐘煎一鐘　不可言。

▼**林靈素進宋徽宗素女丹。**

沒藥　白礬　蓽澄茄

右爲末蜜丸如櫻種大　極美。

▼**陶眞人素蛾丸。**

治腎虛腰痛大益陽事。

破故紙一兩炒　杜仲剉研五錢炒令黃色加用核桃肉五十個去皮

右爲末丸如梧桐子大每服三十丸空心炒米湯送下。

▼宋徽宗幸李師師命利劑局製龍骨珍珠方

芙蓉五錢　膽酥三分　射香一分　母丁香二對　大附子五分　鎭陽五分　紫稍花

合　花蜘蛛各五分

共爲細末葱汁爲丸如菜豆大每服或用三四釐酒調　日中上藥至晚溫

▼貂蟬對炉入戸丸。

柯子皮炒黃一錢　枯礬一錢　川椒末三分　晃腦三分　桃毛三分　母丁香一個

右爲細末煉蜜爲丸如黃豆大每夜　亦趣。

▼武三思進韋后快女丸。

五味子不拘多少　柿子皮酒浸三宿陰乾

右爲末吐津爲丸如指頂大　極美。

▼南郡宮主千金不易方。

栢子仁五錢　附子　鹿茸各三錢

右爲末每服五分溫酒送下日進三服夏用蜜爲丸　不可言。

▼楊妃小浴盆。

官桂、木別子各一錢　白礬七分

右用水五椀煎三椀　不盡述。

古來秘藥として種々の藥物が調合されて居る、其の個々の藥物の中、最も重要なもの三四種を擧げて其れ自身の性能を調べて見る。此の例は「和漢藥考」から拔かうと思つたが、多少文學的であると云ふ所からわざと「和漢三才圖繪」によつた。

○蟾酥

これは蟾蜍の眉間から出る白汁にして、目に入れば赤く腫れ盲す。紫草の汁を以て洗

へば卽ち消ゆ。

味は甘辛く溫なり。毒有り主治効能、痃疾及疔、惡腫を治す。

○海螵蛸

烏賊の骨能く婦人血閉不足の症を治す。

味鹹にして微溫。唾血、下血、又止ニ瘡多膿汁不レ燥。

○肉蓯蓉

肉蓯蓉生ニ河西、陝一西、鴈一門一是野馬精落レ地所レ生也。」

氣味、甘微溫、

されど僞物多し。

○草蓯蓉

肉蓯蓉の代品となせども藥効は大に劣れり。

○鎖陽

生ニ肅州一生ニ韃靼田地一野馬或蚊龍遺精。

其の形　類す。或は謂ふ里の

蓉に百倍す。

○遠志

氣味、苦溫。强レ志益レ精治ニ善忘一

○陰羊藿

氣味、甘溫氣香。

能益ニ精氣一堅ニ筋骨一三焦命門藥眞陽不足者宜之久服使レ

此藿一故名。

○牛膝（いのくつち）

氣味、苦酸。

能引ニ諸藥一下行筋骨痛風在レ下者宜レ加ニ用之一……得レ酒則能補ニ肝腎一生用則能去ニ惡

血一姙婦最忌レ之。

有レ子嘗

牛膝攝河二州之産最佳婦人良方云生胎欲去者牛膝一握搗以無灰酒一盞煎七分空心服仍以獨根牛膝塗麝香

○兎絲子（れなしかつら）

氣味、辛甘平。

益氣力補不足　堅筋骨養肌久服明目延年治男女虚冷得良。

○枸杞子

氣味、甘。

堅筋骨耐老除風去虚勞補精氣治心病心痛腎病消中滋腎潤肺。

○地骨皮（枸杞根の皮）

下焦肝腎虚熱者宜之。

○蛇牀子（ひるむしろ）

氣味、甘苦辛。

獨り男子のみならす婦人にも益あり。世人此の藥を捨て置き遠く異域に靈藥を求めんとするは目を賤め耳を尊ぶに非ずや。

○補骨脂（破故紙）

氣味、甘大溫。

補腎不若補脾補脾不若補腎。腎氣虚弱則陽氣衰劣。

○巴戟天

氣味、辛甘微溫。

腎經血分藥强筋骨益精安五臟虚損病人加而用之覆盆子爲之使惡丹參

○何首烏

氣味、苦濇微溫。

功在地黄天門冬諸藥之上能益氣血癰疽瘰癧諸疾可治矣此藥流傳雖久服者尚寡。古昔能一嗣、入山取交藤任敎始服之六十有余才而始生數男皆壽其中延秀百六

十才延秀生二首烏一、首烏服レ藥亦生二數子一、年百三十才髮猶黑仍以二何首烏一爲二此名一

次の處方は中々面倒なものだが、かやうに書いてあると、何んだか信仰が出て來て、本當に利く樣な氣がするではないか。

▼七寶美髯丹

烏二鬚髮一、壯二筋骨一、固二精氣一、續レ嗣延レ年。

大明嘉靖初、郡應節眞人上二進此方一、世宗肅皇帝服餌有レ對連二生皇子一、於レ是天下大行矣。

一、赤白何首烏　各一斤浸二米泔一三四日刮二去皮一用二黑豆一升一蒸レ豆蒸レ之暴乾ゝ換レ豆再蒸九次

一、赤白茯苓　各一斤去レ皮研末以二人乳十盌一浸旬腰レ乾研末

一、牛膝　八兩酒浸一日蒸レ之晒乾

一、當歸、一、枸杞子、一、兎絲子　各八兩酒晒乾

一、補骨脂　四兩以二黑胡麻一妙香

皆忌二鐵器一、煉乳丸空心酒服一百丸

▼四神丸

治二腎經　虛一損　眼一病　昏一花或雲翳遮レ暗

一、枸杞子一斤好酒潤透分作二四分一四兩用二蜀一兩一炒　四兩用二小茴香一兩一炒　四兩用二脂麻一兩一炒四兩用二川楝肉一兩一炒　煉二出枸杞一加二熟地黃白木白茯苓各一兩爲レ末　煉蜜丸服

▼地仙丹

春采二枸杞葉一、名二天精草一、夏采レ花名二長生草一、秋采レ子名二枸杞子一、冬采レ根名二地骨皮一、並陰乾酒浸一夜晒レ露四十九晝夜待レ乾爲レ末煉蜜丸如レ彈丸大一、每早晩各用二一丸一細嚼以二百沸湯一下レ之但無レ刺味甜者宜レ用有レ刺者服レ之無レ益　能除二邪熱一、明レ目輕レ身一、老人服レ之壽百余行走如二飛髮反レ黑齒更生陽事强健。

秘藥の材料を書いた傳手だから、今村氏に敎はつた朝鮮人が用ゐる所の藥品を書いて置かう。

○人蔘　を分つて次の四種とする。

一、白蔘。 耕作したる人蔘を白ら干しにせしもの。

二、紅蔘。 同上質のよきものを蒸して乾燥し、あめ色になつたもの。目下は支那輸出品專賣なれば朝鮮では買へぬ。

三、山養蔘。 上項の人蔘の種を山に蒔き、自然生の如くゴマカスもの。見る人が見ればすぐ判る。

四、山蔘。 山に自然生のもの。古きもの程よし。一本二、三千圓に及ぶ。

○鹿茸。

春の末、鹿の角がのび血色を帶び、未だ柔かき時切り取り、乾熱にて乾燥したるもの。此の鹿の角を取る爲に飼ふのがあるが、飼養の鹿は効能薄しと。（後藤朝太郎氏によれば特別に飼養した鹿が一番いゝとある）鹿の種類は日本のと同種類である。

○虎の骨及

骨はソツプとし、　煎じ、或は生食する。非常に高價である。

此の外、牛や犬の　服用する。猶松の實、淫羊藿も使用される。

以上に列記した支那の秘藥類は所謂仙藥類の魔法的處方は別として、本草類を縱横に驅使した藥方は、看板程利く利かぬはこの次として、醫術的のものである事は確かである。斯うした支那の秘藥類は多くの本草書類によつて大體そのまゝ日本に渡來したものらしい然しながら此處で注意す可きは、支那本國に於て、醫術的秘藥と、殆んど其の數を同じくする程澤山ある魔法的處方が、日本へはあまり渡らなかつた事である。これは彼我國民性の相違とでも云はうか？　或は佛敎の勢力下にある日本へは道敎の侵入する餘地がなかつたからでもあらう。譬へば日本の仙人と云ふ者は、其の通力を得るに、多く肉體的の猛烈な修業による樣である。支那の仙人道士は先づ丹爐の術に取りかゝる。此の邊の思想も日本と支那と違ふ所であるらしい。

支那と交通の開けざる以前に於ける日本にどんな秘藥があつたかは、寡聞の爲殘念ながら述べるものを持たぬが、やがて奈良朝の唐制模倣時代に至つて、支那式の秘藥が流行し

て日本秘藥史の第一頁を飾つたと見ても大して獨斷でもあるまい。

とに角日本の秘藥に使用される材料が殆んど支那と同じであつた時代に吾が彼の眞似をするのは當然であつて、德川時代西洋諸國とも交通する樣になつてから、やつと支那臭を脫した日本物らしい秘藥が出來る樣になつた。

然し、日本人は斯うした問題を、支那人程徹底的に研究する人種ではない。從つて秘藥が最隆盛を極めた江戸期に於ても、これを研究發表する連中も十中の八九は戯作者連中であつて、眞面目な醫學者が斯うした研究を完成した例は殆んど聞かない。

つまり江戸人には秘藥とか秘具とかは、支那人程に生活の必需品ではなく、全く遊戯半分のものだから、そんなに血眼になれる筈もない。だから此の種秘方を載する書物は專門の醫書よりも、春本戯作類に多い。

又私としても、何も醫者ではあるまいし、學術上利く利かぬのセンサクより、文學的、風俗學的興味に引き付られて、春本類を引つくり返して居る方が面白い。で、日本秘藥の

研究は殆んど江戸期の情を持ち込むのは野暮と知るべし。

これを試みて、利かなかつたと私の所へ、苦

さて秘藥方所載の艶本の形式を大別して見ると凡そ左の三ツに分つ事が出來る。

一、「女大學」等を模した教訓書風のもの、所謂教科書式のもの

一、「文の……」といふ戀文式の卷末又は上欄へ種々の戀愛術と共にしるせしもの

一、末期赤本等の埋草式に載せしもの

以上の內、最も多いのが戀文形式のもので、「文しなん」なんて本は私が見た丈でも三種類も異本があつた。然し其の藥方に變化があつて面白いのはやはり末期赤本類で、大抵は前に出た本の重出又は轉化ではあるが、其の豐富な點、奇拔な點、人を喰つた點、甚だ愉快である。女大學模本式のものは前二者に較べれば尠く、英泉の「女才學」位が其のイ、所ではあるまいか？　尤も教科書式のものでは「枕文庫」の大作がある。

所で、其の當時、艶本所載の秘藥はどの程度まで實行されたであらう？　私見を以つて

すれば、玉琄丹とか、寸陰法とか、壯腎丹とか、黃素妙論直譯式の複雜な、數種漢藥調合の秘藥が一般民衆の娯樂用として流行したとはどうしても思はれない。何故なれば、當時の民衆が秘藥を必要とするときは至極簡單に四ツ目屋によつて供給され得る時代である。何を苦しんでそんな小面倒な藥方を手製する勞をとらんやである。だが、猶その面倒を敢てした者があるとすれば、それはごく少數の多少文字ある箸にも棒にもかゝらぬすれつ枯しの好奇家であつたであらう。從つて艶本所載の大多數の秘藥は、一般民衆にとつては只見て微笑をもらすのみで、實行にまでは至らなかつたと見るが穩當ではあるまいか？　但し、此研究中に再三出てくる簡單な藥方、卽ち青竹の薄紙とか黃菊の汁とかは盛んに實驗されたものかもしれない。先づ秘藥處方を發表して見やう。

秘藥方

○黃素妙論　天文二十一年正月　今大路道三譯

（一）　玉琄丹

一、龍骨一分。一、訶子（炮去レ皮）二分。一、縮紗二分。一、辰砂五分。

右四種各細末にして餅の糊にて小豆程に丸くし、　七粒溫酒にて服すれば女人三人五人に

（二）　壯腎丹　（男の衰へたる腎を補ひ氣分を增し

一、丁香一匁。一、附子一匁。一、良薑一匁。一、桂皮一匁。一、由茱萸一匁。一、蛤蚧一匁。

一、礬石七分。一、水飛七分。一、硫黃七分。

右八藥細末にして蜜にて練り、むくろじ程に丸め空腹の時に三粒づゝ溫酒にて飲むべし。但無妻の男子は卒爾に飲むべからず。

（三）　西馬丹　（筋肉を補ひ　良藥なり）

一、沈香五匁。一、乳香五匁。一、沒藥五匁。一、木香五分。一、兎絲子五匁。一、茴香一匁。

一、硇砂岩一兩。一、桃仁（去レ皮）四十箇。

右八藥を各細末にし練りたる蜜にてこねて胡桃程に丸くし、空腹に一粒宛溫酒にて用ふ。一ヶ月に及ばゞ　強くなるなり。

（四）　寸陰法　（女人の

一、蛇床子十二匁。一、狗骨灰三匁。一、肉桂三匁。

右三藥細末にして

ふ事淺からず誠に千萬無量なり。

（五）　綠鶯膏　（心の深き女用ふべし）

一、丁香三粒。一、山椒四粒。細辛。龍骨。海螵蛸。明礬。各少量。

右六種各細末にして生蜜にて揑ねて

行ふ時は、　現すなり。

（六）　如意丹

一、石樗皮。一、木香。一、山藥。一、蛇床子。一、吳茱萸。

右等分細末にして

○春畫奇談　支那風橫本（黃素妙論の異論なり）

綠鶯膏と如意丹とを載す。

○修眞演義

（一）　始皇童女丹

一、石榴皮。一、青木香。一、茱萸。一、蛇床子　各等分。

右爲細末用津調入

（二）　金屋得春丹　（金屋得春湯として枕文庫にあり）

一、石榴皮。一、菊花。各等分。

右爲細末一碗煎七分溫　之美也。

（三）安祿山徹夜恣情散（枕文庫にあり）

一、蟾酥二錢。一、胡椒五分。一、麝香三錢。

右爲細末取二三分用津調午後

（四）隋煬帝遍宮香（枕文庫にあり）

一、阿芙蓉二錢。一、蟾酥一錢。一、朱砂五分。

右爲細末取二三分用津調如前法其妙亦無究也。

○貪道禁秘抄（第四十九回）　大極堂有長

（前略）

禿筆頭を灰とし酒を以て空心一二錢を服す須くあつて起る事を得たりと、愚按に禿筆頭は敗筆也綱目曰男子　時珍曰不用新筆可用敗筆。取其膠筆墨沾滋、又曰上古以兎毛作筆後世以羊鼠毛作筆惟非兎不可藥用宜心得。

○春鶯析甲　茅渤　活々庵主人撰發者

蓋諸龍方也書二其昏方干此一以間レ世、修レ之用レ一日　却取二洞天僊府之嬉一也、看官們信而莫レ嘲焉

（一）野婆鏡印　一枚　阿濕婆牡柄二枚　莫訶婆伽一膁　胡蘆藤一支

總計四品爲レ末煉以雀蜃一搗

○好色旅枕　元錄八年刊

（一）倫子藥（嬉契紙の類か？）

（二）女嬉　藥法なし。

（三）鶯命丹

（四）られん香

（五）喜契紙

○女令川　美濃判　古きものか？

一、うりう四分。一、にんじん三分。
是二色を粉にしてすゞしの袋に入て

○小犬つれ〳〵

（一）朔日丸（流經藥）
前の仲條流ついたち丸、らうゑん、のみはらまぬことを願ひ賜へり……云々

（小横長本　畫は西川風）

○

（一）ほれぐすりの方
（イ）蠅の　竹のつゝに節を分けて兩方へ入れ、思ふ女のかよふ道にうづみ置き、通りたると思はゞ掘だし見るに節を喰ぬき一つになるもあり、又喰ぬかずとも此れを黑燒にして女にひねりかくるときは思ひつかずといふ事なし世にいふ蠅藥是なり。
（ロ）又方。

くなる物なり。

子の日の子時に　土器に入れ
よくぬりこめて黑燒となして
なり若呑ますれば、ふりかけても奇特あるべし。
（ハ）又方
女蛇のきぬを粉にして　めん〳〵に粉にして一方は女に呑ませ一方
（ニ）又方
はわれ呑む可し。
（ホ）又方
かしわ鳥の右の蹴爪取女の小袖にさすべし奇妙なり。
（ヘ）又方
赤き鷄の蹴爪を取り、左右を覺へて思ふ女の左右に置く可し、大秘方なり。

（二）

大きなる蛤を灰のいらぬ様に燒きて身をしぼりて彼の汁を又貝からへ入れ燒き灰の上に置きこげぬやうに自然に貝殼へひつかせて、こそげ落して其の中へ丁子の粉を耳かきに半分入れ

（三）

一、りうこつ四分。一、かし二分。一、しゆくしや五分。一、ちやうじ一日。一、しんしや二分。

右五味を粉にして、もちのりにて小豆つぶ程にして用ゆ。

（四）

せんそ。

右一味を粉にして常に懐中し、

（五）

白銀粉かけ目一分。

右を飯つぶにて練り、たしなみ持つべし。

てふさぎ、其の上を帶にてしかと

（六）　阿蘭陀人の傳授奇妙女悅丸

（イ）　蜻蛉の中に鬼とも又澁ともいふ柿色なるの首を取つぶし其の油を

（ロ）又方

一、じやしやうし。一、くこつの灰。一、肉桂。

右三色おの〳〵等分粉にして

此藥の名を萬年思悅丹といふ。

（七）

一、ぢんかう。一、にうかう。一、もつやく。一、もつかう。一、とし丶。（各〳〵五分づゝ）一、はこし七分。一、うね香一分。一、とうにん四十。

右八色粉にして水にてこねてくるみの大きさに丸じあたゝめ酒にて一粒づゝ毎朝用ゆ

一月に及びて

なる奇妙なり。

（八）

一、蝸牛　一名　かたつむり　でゝむし　なめくじり　一、たうごまの實。一、しやうぶの根。

右三色粉にして唾にてねり

○文のまこと　全　不學齊文晴誌

（別名）繼情奇文　懷中要辭（えうじ）（お經作りの小形本なり）

奇藥調製法秘傳

（一）

一、菓子昆布。一、ふのり。

右二味をよく細末にしてつばにてとき

決してなし。

（二）又あやまつて疵つきたるには

一、大黄一兩。一、酒一升。

右煮ること一沸（ひとふき）にて服しさて

たちどころに疵いえてこの後は

いかなるあ

（三）

（「實娛敎繪抄」にも此の法あり）

大きなるものはなみ〳〵の
青竹を破り中にうすき紙のごときものあるをとりてよく口にてかみ
と妙也。

(四)　(薬名なし)
一、蛇床子。一、肉桂。一、狗骨　各等分
右三味粉にして
忘るゝことなし。

(五)　(薬名なし)
菊黄の花を火にてあぶりよくたゝき、そのしぼり汁を
奇妙なり。

(六)　(薬名なし)
しきみの葉をとりよき酒にひたし土に埋め置事五日ほどさて取いだしその露をぬり行
たとへがたし。又しきみの葉を燒きてその灰に燒明礬を少し入
れつぶにてとき

(七)　(薬名なし)
女の乳汁をしぼり古井戸の水垢をまぜ合せ

(八)　(薬名なし)
乳の徳あること陰をおぎなひ陽をまし氣血をめぐみて腎をうるほすの妙もつとも廣大
なり毎日これをば茶碗に半分づゝ食後しばらくして服すときは目を明にし氣根元氣を
やしなひ無病長壽ならしむ

も龍のごとく五十の上を越ゆるとも壯年血氣の人にまさりてとぼしてます〳〵さかんなし。猶乳汁のあれども事繁ければこゝに述るのいとまなし。

（九）（藥名なし）

其藥法は

一、地黄。一、黑豆各十觔。一、芭蕉。一、蒿麥藥一、茴香。一、古味噌。一、麒麟血。五味各五觔

右七味をよく煎じて布の袋へ入れ漉しいだしてどろりと練て蜜をすこし入れ壺に入れ貯へ置き四五日經てのち馬の糞をせんじて其の汁にてかの藥劑を軟かにときのばしこ珍。

（十）（藥名なし）

ゑぞ松前の海に臙脂腑といふものあり。

のなれども是を服し用ふるときは男女腎精を潤ほしていかほどとぼすとも虛することなく長生不老の良劑也。故に腎虛に用ひて即効あり。

○逸題（文の……）横長小形本。書體より類推して相當古きもの？

（一）長崎唐人秘傳（きめうのよがり藥）

一、しやうさん。一、ぶし。一、りうこつ。一、さいしん。一、いかの甲。一、明礬

一、山しやう三ッ。

此七色を粉にし水にてこね、

（二）心儘にする藥

一、しゆく砂。一、丁子。一、りゆう骨。一、しん砂。一、訶子。

右八色（八色とあれど五色よりなきは如何）粉にし、餅のりにてほどに丸しあたゝめ酒にて呑む如何なる強きしぶとき

（三）子をやしなわぬ方

くわい胎より二月にても三月をまでの内じや香を少し呑み喰へば其の難をのがれ又は

尤其のとき聲少し出ぬことあり。少もくるしからず。次第に聲も出、身にあやまちなく一生子をうむ事、かたく無し。

（四）又方

（五）女ゑつ丸

この妙藥色々好色本にあれどもよくきくといふ事誰か其の德を見る人なし。今どきの若衆第一氣短く藥をいれてやりくりを其まゝしゆふゆ（原本のまゝ）へ、きかんとなり。我れ秘事をこゝにあらはしよく覺へ其の如くになし給はゞ女もよろこびの藥共いひつべし。きかぬといふ事なし。

一、丁子三粒。一、さんせう三分。

右二色を粉にして、なるほど良き酢にて和らげ、」

らくして取りかゝれば女よろこぶ事甚し。

（六）　又方

一、さくろの皮。一、さん藥。一、もつかう。一、肉桂。

等分に合しなるほど良き酢にて丸じ

（七）　男恋戰丸（ちやうせん）（挑戰丸？）

一、しゆく砂。一、丁子。一、りう骨。一、しんしや。一、かし。

右五色粉にして餅のりにて丸じて　七粒酒にて用ゆべし。

丶事難し。水を呑めば即座に洩るゝ也。

（八）　玉ぐきに物の出來たる療治　はこべの影干いますこしいづれも粉に

あわつぶのやうに物出來、

して油にて付く。又竹のむしくそもよし。

（九）

しらみ、うつつたるには　豆腐の湯わかし明礬少し入れ洗ひてもよし。又

酢のあつきをぬりてもよし。

（十）　楊貴妃小浴盆

（枕文庫に重出せり。）

○艶道日夜女實記　横本

（一）　女悦きめう丸

一、にんじん。一、りうこつ。一、いかのこう。一、ぶし。一、さいしん。一、さん

せう。一、こしつ。一、みやうばん。一、じやろう。一、てうじ。一、につけい。一

せきりうひ。

右十二いろをとうぶんこにして水にそくいか又はもちのりを少しまぜ合せむくろじほ

（二）

一、うりう四分。一、にんじん二分。

右二色をこにしてすゞしのふくろに入て開中に入てよからすべし

ともによろし。

（三）

一、ちんかう。一、にうかう。一、もつやく。一、もつこう。一、とし。右各五分。

一、うゐきやう一分。一、はこし七分。一、たうにん四十。

右八色をこにして水にてこねくるみほどにして用るべし。

（四）

一、てうし。一、りうこつ。一、しゆくしや。一、かし。一、しんしや。

此五いろをこにしてもちのりにてあづきつぶほどにして、一りうづゝさけにてのむべしせいつかれたる人は此一はうよく〳〵心得べし。

○毬歌國字解

（一）詹草

帝女の化する所、其の花黄にして、實、豆の如しこれを服すれば人に慕るゝなり。

（二）紅蝙蝠

是を佩ぶれば人にほれらるゝ由北戸錄に出たり。

（三）石鍾

大鵬の遺精也。粟粒許を含む時は

（四）媚の術（番外）

女の月水に生魚を入れ厠中に置く時は吝嗇も金錢を不ゝ惜。倡女を慕ふ由、祝允明が志怪に著せり。

○艶道通言文のゆきかひ　（美濃半截判）女好庵主人編　文政頃

（一）　開縮丸

一、てうじ三粒。一、さんしやう四粒。一、りうこつ。一、明ばん。一、かいへうしやう。一、さいしん。この四味少しづゝ。

右藥名を開縮丸といふこれを細かにして生蜜にてねり小さく丸めおきてさておこなは

○萬寶智惠海　（文政十一年初版嘉永三年再版）

（一）　子なき婦人をもふくる術

二月亥丁の日杏花と桃花とをとりて蔭干にし末にしてつちのへねの日くみたての水に

先一さじ服すべし日々三度のむべし必ず子をもふくるなり。

（二）

にんにくの煎汁にて度々洗ふべし。

又杏仁を燒灰にし熱き處を

（三）

芭蕉の葉をせんじて洗ひくちなしを粉にしてぬるべし。

○枕文庫　四編九册　半紙本　英泉作

閨中秘藥三傳

（一）　金屋得春湯

一、石榴皮。一、菊花　各等分。

右細末水一ぱいを七分めに煎じ

（二）　安祿山徹夜止情散（しじやうさん）

一、蟾酥一錢。胡椒五分。麝香三錢。
右細末にして行ふ一時前に唾でとき
數人にても心のまゝに樂るゝ也。

(三) 隋煬帝遍宮春

一、阿芙蓉二錢。一、　二錢。一、朱砂五分。
右前の法のごとくにして行ふ。美快かぎりあるべからず。

(四) 楊貴妃小浴盆

一、官桂一錢。木鼈子一錢。白礬七分。
右水五杯を三杯に煎じ
快なり。

(五) 紅毛長命丸之製法

一、丁子。一、阿片。一、蟾酥。一、紫梢花各一錢。一、龍腦。一、麝香各五分。

(六) 無雙女息丸之法

一、蟾蜍多。一、阿片多。一、胡椒少。一、山藥少。一、蓴肉少。一、昆布鹽少。
右六味蛤の煎汁にて練乾し細末にして用ゆべし。

(七) 凡發蕩　良藥

(イ) 一、手長海老黑燒一錢。一、附子五分。
右粉にして常に溫酒にて服する時は健にいきり立つこと妙なり。

(ロ) 又法　(本草に出たり)
一、蜂巢黑燒。用ゆるもよし。

(八) 長命丸異法

一、丁子。一、龍腦。

右細末にして蛤の汁にてとき塗るも妙なり。

（九）操守香。秦始皇帝

一、硃砂。一、密陀僧。一、乾胭脂各等分。

右細末にして蝙蝠の血をとり練り合せ女の身上にぬりつくれば年を經てしりぞかず。もし其婦人別人と交を偷めば其の色にしるし現はる。實に不測の法なり。

（十）女の心亂す秘藥

一、狗骨灰三匁。一、肉桂二匁。一、陽起石。一、熟地黄。一、桑螵蛸。一、破故帋各二匁五分。

右六味を細末にして鷄の卵をもつて〇ほどに丸じ酒にて女に呑ましむれば夫ある女は夫のそばへ行きしなだれ夫なき女は男ほしくなる也。

（十一）嗅て女の心を亂す藥（文しな無天のうきはしに重出せり）

一、丁子一匁。一、甘松一匁。一、紫梢花八分。一、白檀二匁。一、附子二匁。一、五八霜。

一、麝香六匁。一、龍腦八分。一、海狗肝八分。

右九味細末にして煉密にてねり土器に入地中に埋め七日ほどへて取り出し香氣のぬけざるやうに貯へ置き女に對して何氣なく焚べし。なり。

（十二）

一、蟾酥　一味細末にして貯置く。

（十三）

（イ）一、甘草三分。一、生姜三分。一、芍藥三分。一、肉桂三分。